

西大學生報

第 二 百 二 十 八 號

昭 和 十 年 四 月

目 次

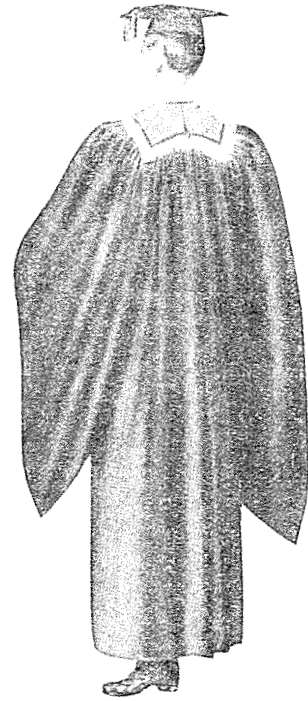
學理研究に就ての所感……仁保龜松……(一)	新學年を迎へて……武田藏之助……(四)
碩學ウイノグラドフ教授の片影……矢口孝次郎……(五)	僞證罪の話……川並秀雄……(二)
學 內 報……(六)	卒業証書授與式―入學試験施行―學部各改稱― 法文經濟學部長改選―教員異動―通商協議員會― 豫科校舍新築起工―配屬將校の更迭―住所移動及動靜― 經濟學部新制學課目表―成績優秀受賞者
本年度學科擔任表……(二)	卒業生氏名……(六)
校 友 欄……(三)	學 會 消 息……(三)
學 生 欄……(三)	關大スポーツ……(三)
逝ける坪内逍遙大人……新町徳之……(三)	圖 書 館 欄……(三)



Kansai University
Gown

← Style No. 1
for Masters

Style No. 2 →
for Students



關西大學ガウン

關西大學に於て曩に學位服・教授服・學生服等制定の議あり、當局よりは是が調査研究方御下命を蒙りて弊店主長谷爲五郎は一九二三、四年に互り英・米・獨・佛・白・蘭・埃・伊瑞の著名十六大學を訪問し到る處多大の厚遇と便益を與へられ服制其他を比較考察の上歸朝復命申候
不敏店主この重任を荷ひ僅に使命を辱めざりしものは又實に海外に於ける關西大學の隆々たる名聲と當局の懇篤なる御指導の賜に外ならず候
爾來技術部を改善し準備萬端全く整齊致居候へば何卒在學生・卒業生其他關係者各位の御用命を切に奉待候

店主 敬白

紳士服に並關西大學制服

長谷屋洋服店

(御注文専用)

二三四

一〇〇

五九九

四四四

南天王寺

電話番號
變更



學理研究に就ての所感

學博士 仁保龜松

新學年の開始と共に、吾々學徒が清新の意氣を以て、學理の研究に突進し、眞理の探求に精勵せんとするに當り、偶々我が國體に關する一學說に就て意外の紛議を生じ、國家及び法政の諸學に従事する學徒をして、筆禍舌難を危懼せしむるに至りたることは眞に遺憾千萬である。予は嘗て我國古代の法制史の研究に關し、或は我が國體に關する法理問題の研究に就て、筆舌の禍難を招くことあるべき機會に遭遇し、又多少學理研究の自由、促進、發表等に關して考慮する所ありたるに因り、新學年の初頭に於て、此等の事項に關する所感を述べて青年學徒の注意を促がすことは、必ずしも無意義の徒事にあらずと信ず。

抑も學の起源が質疑の念に存することは、夙に希臘古代の賢哲に依りて説破せられた所である。即ち吾人が種々の事物に接して不思議の念を起し、諸多の現象に對して怪訝の心を生ずるときは、之を釋明せんとする知的慾望を生ずるに至るものであつて、自己の理解力又は考察力が、能く此等の知慾を満足せしむるに足る解決を與ふるときは、之に依りて相當の知識を發生收得せしむるものであ

る。而して更に同種類の知識を組織的に綜合して、無形の知的體系を構成するに至るときは、斯る精神的構想全體を指して學識、學問又は單に學と稱し、客觀的存在を保つものと解せらるるのである。

左れば吾人が有形又は無形の諸現象を理解せんが爲めに、疑問を起すことは即ち知識又は學識を收得し、更に學問又は學を成立せしむる原動力であつて、從て又吾人が學を修め學理を研究するに當り、自ら注意して巧に疑問を起し、常に其の解決に努力することは學問研修の要諦秘訣たることを推知すべきである。

次に學理を研究するに當り、他より何等の壓迫妨害を受くることなきを要するは自明の事理であつて、權力、武力又は金力に依りて妨壓又は誘惑を加へられ、之が爲めに研究の實を擧ぐることは能はざりし事例は、今尙ほ吾人の見聞又は實驗する所である。之れ今日の學界に於ても、研究の自由を要求する叫聲が斷絶することなき所以であつて、近時我が國體に關する一種の學說に對し、論難攻撃の激烈なるは當然の理勢であるけれども、感情に激して直接行動に訴へんとするに至りては、終に學理研究の自由を壓迫し、法政諸學の發

達を妨阻する弊を馴致せんことを懼る。然しながら學理の研究、殊に國家及び社會の學理研究に没頭する學者に取りて、最も注意せざるべからざる一問題は、研究の自由と發表の自由との差別及び關係の如何に存し、然も論者概ね研究自由の要請を以て當然發表自由の要請を包含するものなりとし、研究の結果を自由に發表することを得るに非ざれば、研究の自由其のものは無意義に歸すと推論して、双方の自由を混同し、或は相即不離の關係に立つものなりと論斷せんとするのである。

予の見る所に依れば、研究の自由と發表の自由とは、密接の關係を有する學界の二大要請であるけれども、學理の研究は元來學者の考察推理の作用を以て、其の本據とする内面的心神界の事象たるに反し、研究の結果たる學説を發表することは、言語又は文書に依據する外面的行爲界の事象であるから、双方互に相異なる性質の事象たることは更に辯明を要せざる所である。吾人が種々の考察思想を腦裡に保存し、又は胸中に秘藏するにも拘はらず、敢て之を談論又は文筆に發表せざることあるは、何人も日常經驗する事實である。殊に良巧の案見を懷抱するに拘はらず、之を言明することの不利益又は不得策を知覺するときは、故意に發表を停止することあるは別に怪しむに足らざる所である。左れば研究の自由と發表の自由とは全く別異の事象であつて、學理の研究は學者の考察力に依りて、内面的に自由に遂行することを得る限りに於ては、法令其の他の權力作用に依りても、有効に之に干渉し、又は強制的に制限を加ふることを得ざるに反し、研究の結果たる學説の發表に至りては、學者の外面的行爲であるから、權力者が必要に應じて法令其の他の手段に依り、

有効に制限又は禁壓を加ふることを得るは當然の事理である。茲に於て予は學に従事する者の至當の要請として、極力研究の自由を主張するけれども、學説發表の自由に至りては、公安公益又は美風良俗との關係に於て、無制限に之を主張すること能はざるのみならず、寧ろ適當に之を制限する必要があることを是認するものである。例へば諸國の國體に關する學理的研究の如きは、學者は自由に考察を加ふることを得るけれども、我が國體と相容れざる學説に至りては、法律上當然其の發表を禁止することを得るのみならず、我國の臣民たる學者は國民指導の位置に鑑み、自ら進んで斯の如き自説の發表を控制することを要するは、更に辯明を要せぬ所である。

予は元來學説の發表に關しては、彼の有名なる哲學者「カント」の心境に共鳴するのであつて、氏の國家及び法政に關する學説に對しては、其の理論の矛盾又は不徹底を指摘して、深刻なる酷評を加ふる學者少からざるを見るのであるけれども、之と同時に「カント」が當時の專制政治の爲めに、甚しく言論の自由を檢束せられたる事情を諒解する學者は、寧ろ多大の同情を以て「カント」の心裡を洞察し「元來「カント」は自己の懷抱する學理上の確信を取消し又は否定することを以て、唾棄すべき卑劣事であると認むるに拘はらず、專制政治の下に於ては敢て此の確信をも表明せざるのみならず、却て沈黙を守るを以て臣民たるの義務なりと解したのである」と評論せるを見る。畢竟「カント」は學理研究の自由を認めて、其の收得したる確信は堅く之を腦裏に保持するけれども、之を發表する自由に付ては、自ら進んで適當の制限を加ふる必要あることを認むるのみならず、臣民の義務として沈黙を守らざるべからざることあるを覺悟したも

のであつて、明かに研究の自由と發表の自由とを區別したることを推斷するに足るのである。左れば我が國體に關する學說の如きは、假令其の研究の自由を認め、殊に諸外國の國體との比較研究に依つて、我が國體の特性を明徴にするとも、研究の結果たる學說を發表する上に於ては、學者は其の用語、方法、時期等に付て、深甚の注意を加ふることを要し、殊に考察推理の上に於て過誤又は欠缺あることを自覺したるときは、潔く之を訂正補足し、國民をして誤解を生ぜしめざることを要す。

更に進んで、學理の研究は自由たるを以て本則と爲すけれども、元來自由其のものは隨意放恣即ち我儘勝手たることを意味するに非ずして、自由の概念が秩序の概念と離るべからざるものたることは、西洋哲學の始祖とも稱せらるる「ソクラテス」は夙に之を提唱し、「カント」も亦自由を以て合理的概念なりとし、言語に依りて其の本相を説明すること能はざれども、各自の體驗に依りて之を諒解することを得べしと推斷したるが如く、自由は畢竟吾人の理性又は良心の要請に由來する道德的概念である。左れば學理研究の自由も亦一般自由の本義に照らして、自ら德義的又は合理的に制約せられたる概念であつて、從て學者が學理を研究するに當りては、決して法律、道德又は公序良俗を無視し、隨意放恣の研究を爲し得るものに非ざることを推知すべきである。要するに吾々學徒が研究の自由を要請することは、學理を究明し眞理を把握せんとする目的を達成する爲めに、必要の手段として正當の理由を有するけれども、此の自由には研究の結果を發表する上に於ける法律上の制限と、一般自由の本義に由來する道德上の制約との二重の約束が隨伴するものたること

を覺悟すべきである。

終りに學理研究の自由と相待ちて、學問獨立の原則に關し一言する所あらんとする。即ち學問又は單に學其のものの意義に付ては學者の解説歸一せざれども、知識の組織的全體を指して學と謂ふことは普通の解釋であつて、從て學問の目的は眞正の知識を啓發するに在りと解すべきである。然らば學問が此の本來の目的に向つて其の使命を果しつゝある限りは、所謂自主目的として學問の獨立を主持するのであるけれども、古今東西の文化史又は政治史を通觀するとき、學問は往々宗教上又は政治上の權力の爲めに利用せられ、本來の目的を忘却して教權の擴張又は政權の濫用に驅使せられたるのみならず、直接に此等權力の爲めに、其の獨立を壓抑又は蹂躪せられたる事例少からざるを見る。歐洲の中世に於ける彼の科學復興の史實の如きは、畢竟基督教權の爲めに獨立を蹂躪せられたる學問其のものの覺醒反撥の事績を叙述したるに外ならず。近代に至りても政權又は金權の爲めに、學問の獨立が壓抑又は阻害せられたる事例頗る多く、所謂御用學者なるものの輩出の如きは其の一端を證明するに足ると言ふべきである。而して斯の如く種々の權力又は勢力に依りて學問の獨立が妨阻せらるるときは、學理研究の自由が甚しく制限又は蹂躪せらるることは當然の理勢であるから、吾々學徒は決して此等の權力又は勢力に阿附迎合することなく、斷乎として研究の自由を主持し、之に依りて學問の獨立を擁護する覺悟を有せざるべからず。即ち國體に關する一學說に對し、論難攻撃の紛起せる時に當り、聊か所感を述べて學徒の注意を促がす次第である。



新學年を迎へて

専門部主事 武田 藏之助

茲に諸子と共に新しき然かも希望に輝く新學年を迎ふるに際し先づ以て歡喜に満ちたる在學生諸子の進級と新に入學せられたる諸子に對し衷心慶祝の意を表する次第である。

本學専門部は諸子御承知の通り學則冠頭に於て専門學校令により高等専門の學術を教授し兼ねて人格の陶冶及國體觀念の養成に留意するものとあり此の大精神は諸子が毎に拳々服膺して忘るゝ事なきを期すべきである。勿論人格修養の方法に於ては諸子の工夫に待つものであるが、日常生活に於て毎に教育勅語の御趣旨を奉戴し之を實踐履行することに心懸ることが何より大切で、苟くもこの御聖旨に悖ることなきを期することが最も肝要である。

元來本大學は諸子の知る通り來年度は創立滿五十周年の大盛典を舉行せらる實に古き歴史を有し質實剛健の學風をその傳統的根本精神となしつゝ、今日に及び來たりたるものであつて、この光輝ある歴史に對して諸

子は愈々益々校風の美化に務むべく之諸子の責務と曰はざるべからず、現に専門部第一部により構成せらるる天六學友會々則によるも會員相互の親睦を計り健全なる精神身體の修養に努め以て關西大學建學の主旨に基ける學風を振興あるを以て目的とすとあり、又専門

部第二部により構成せらるゝ學友會々則には本會は本學建設の趣旨に従ひ會員相互の親睦品性の修養體方の養成に努むるを以て目的とすとあり、要するにこの歴史ある學園に入學せられたる諸子は質實剛健なる學風を體せられて何れも各自自重勉勵人格の向上を圖ると共に正しきを踏んで誤らず醇厚中正の精神を涵養すると共に浮華放縱を斥け驕佛詭激を矯め毎に自省克く本學々生たるの本分を盡す覺悟なかるべからず。

茲に諸子の注意を喚起したいことは晝間専門部學生と夜間専門部學生とは勉學の方法に於て自ら異るところがあると思ふ、前者は多く父兄の擁護のもとに勉學にいそしまれる境遇にあるのであるから學生々活に浸

り味ふ機會に恵まれてゐると思ふ。しかし専門學校は中等學校に比して諸子を拘束強制すること少く、研究の大綱並に方針を教授して専ら學生諸子の自由討究に委する點が多々あるを以て、諸子の昨の拘束生活は一朝にして一躍自由の天地に放たれた感を抱き免もすれば不知の間に漸次弛緩放恣に流れることは有り得ることと思ふ。この點は特に注意を促すと共に十分の誠心を以て將來に臨まれ過ちなからん事を切に冀望する次第である。夜間専門部學生は時勢の要求も然ることながら晝間夫々一定の職務に従事しその傍ら向學の意氣に燃えて入學せられたる諸子が多いことと思ふ。

この點叙上の懸念は尠からんも、晝間職務多忙の結果時間的の制限を受け又は疲勞の結果自然學事を抛擲するに至らんもの無きを保し難い、しかし一旦學に志したる以上飽く迄も之を誠め毎に健康に留意すると共に初志の貫徹に邁進せられ有終の美を致されんことを切望する次第である。

終りに我國は引つゞき眞に國家非常の時であつてこの責任の重且つ大なることを自覺し世人が諸子に期待する所に背かざらんことを最善を盡し各自に興へられたる職務に専ら盡瘁せられんことを、聊か所懐の一端を述べて新學年に際しての辭とする。

碩學ヴィノグラドフ教授の片影

教授 矢口孝次郎

はしがき

ひとり英國のみならず歐羅巴の法制史社會史、また經濟史を研究する者にとつてヴィノグラドフ教授の存在は確かに一つの魅惑である。その數々の著書はひとたびこれに接した者にとつては、魅力と云ふか迫力と云ふか、何か知ら最後まで引いてゆく力を持つて居る。「英國農史論」「マアナ達史」「十一世紀英國社會史」等の代表的の著述、更にその晩年の努力を傾注した「歴史法學大綱」の二卷等、何れを繙いても、廣範なる規模と底知れぬばかりの史料への通曉は先づ吾々を惹き付ける。時に餘りにも豊かな史料の使驅の故に、立論の理解が難澁と思はるる時にさへ、やや大袈裟な云ひ方ではあるが挺身而闘の心構へを以て臨んだならば自ら論旨の運びが釋然とし引用せる史料の意味も納得される。ここにその著書の魅力の一つがある。また教授の歴史研究法たる *from the known to the unknown*

と云ふ簡潔なる言葉の意味が暗黙の中に示されて居るのを知る。元來歴史に於ける事實と理論との問題は、

歴史研究に従ふ凡ゆる人人の必らず通らねばならぬ棘の道である。ここに一つの問題が横たはる。「事實は硝子玉の如きものであつて、これを結合させるためには、玉をまとめる糸が必要である」——ツンバルト。硝子玉の羅列が歴史に非らざると等しく、糸のみの存在も亦歴史の説明ではない。然し世の歴史研究に於いて如何に、或は硝子玉のみを示して歴史となし、糸のみを示して歴史の説明なりとなす歴史家或は歴史理論家の多き事か。これらに對してヴィノグラドフの著述は多くのものを教へる。殊に後者の態度に對して、歴史研究に於いてその基礎としての事實——史料の如何に貴重なるものであるかを教へる。勿論、彼の著述と雖も、その問題に關して全部的なる決定的なる解明を與ふるものでなく、これに對する種々の批評のあり得る

事は疑ない。然し歴史の廣き理解の上に立つて、史料の詮索と吟味と使驅とに於いて最も優れた近代の歴史家の一人であつた事は何人も認めなければならぬ。殊に英國法制史の領域に於いては不朽の業績を遺して居る。實に英國法制史の批判的研究は、ポロツク、メイランド及びヴィノグラドフによつて始めて確立されたと云つても過言ではない。この領域に於いて彼の遺した多くの業績を顧るならば、その長逝が如何に惜むべきであるかが分る。餘光を見て讚嘆するも、敢てわが佛尊しの故のみではあるまい。

然しヴィノグラドフ教授の存在が吾々の心を惹くのは單にその學的勞作の結果によるのみではない。その背後には至誠の人としての彼の一生が織られて居るのであつて、そこにまた崇敬すべき彼の人格の歴史が見られる。學問に對して孜孜として已まざる献身者であつた彼は、また祖國を熱愛する愛國者でもあつた。ゼミナリステンに對して峻嚴に誠實を要求した彼は、また自ら義人の如き態度を以て正義と戰つた。のみならず、彼はまた音楽に造詣深く、チエスの名人でもあつた。然も、かくの如く人として崇敬と愛惜に價する彼に對しても、運命の神は冷ややかであつたのだ。若くして故國ロシアに背いて英國に去り、然も故國への思慕愛着の故に幾度か故國の人民と政府とを啓蒙せんとしたが容れられず、遂に自らこれを捨てて第二の故國た

る英國の市民となつた。然し幸にも、彼を迎へられた英國はこの老齢の學究に幸福なる生活を與へてくれた。

學識ある友人と彼に傾倒する門弟との裡に在つて落付いた學者生活が續けられ、また數數の名譽ある地位が報ひられた。その間世界の各地を歴訪する餘裕を以て比較法學の大作を築き上げつつあつた。然るに尙も運命は彼の永眠の場所を、モスコウにも非ず、牛津にも非らざる巴里の客舎に選んだのである。生前愛著した二つの故國に夢をほせつつ、この碩學は「完成した生來の世界人」に相應はしく巴里の客舎の一室に於いて永眠した。それから既に十年の年月が流れた。

今ここにはヴィノグラドフ教授の學問上の業績を語らうとするのではない。彼の偉大な著述の中に今も低迷しつつある筆者にはそれは他の機會に譲らねばならぬ。(ここにはただ、フィッシャー (H.A.I. Fisher) の「ヴィノグラドフ傳」Paul Vinogradoff, A memoir. 及び「メイトランド傳」F. W. Maitland, a biographical sketch. 等を興味深く讀んだ結果、拾ひ上げた片片を綴つて、運命の人、碩學ヴィノグラドフの片影を描いて見るに過ぎない。

少年、青年時代

先づ順序として少年時代及び準備時代としての青年時代の事を簡単に述べて置く、

多くの天才の一生は既にその少年時代に培はれて居

るものであるが、この事は彼に於いても例外ではなかつた。

彼 Paul Gavrilovich Vinogradoff は、一八五四年の暮、モスコウの東北約二百哩にある少なき町コストロマ——それはロマノフ王朝發祥の地であるが——に生誕した。歴史學の教師でありまた著しく保守的なガヴリール・キプリアノウイチを父とし、人格者としてまた聰明なる婦人として彼が一生懐んだエリーナ・パブロヴナを母として。彼の家庭は、然し既に異例であつた。即ちここには既に三人の異母兄があり、また後に彼の母には六人も弟妹が生れた。然し聰明なる母は、農奴出の下婢らに傳かれて我儘に育つた兒童の感化を恐れて、妹サーシャと共に彼を自らの手で親しく養育したのであつて、これが彼の天才を見出し且つ培ふ事となつた。

少年時代の彼は白智瘦身の神經質の子供であつた。

病氣こそしなかつたが多感の性質の持主で、かかる少年に有勝の如く、記憶力は異常に強く、見るもの聞くもの悉くを深く印象に止めて居た。然し世の常の子供らと等しく戦争遊びもし、英雄に對する憧憬も懷いて居たので、アレキサンダー大王、シーザー等が彼の愛好する英雄であつた。尤も彼にはそのほか好きな小説家ウォルター・スコットがあり、また妹サーシャと共にロシヤ語でシェクスピア、ドイツケンス等を讀むたのしみがあつた。この點では既に凡俗の子に非らざる一面

を示して居る。然し少年時代に於いて彼の一生にとつて最も重大な影響を與へた事は、語學と歴史への興味を種へ付けられた事であらう。ジョン・ステュアート・ミルの記録には及ばないにせよ、既に幼時より外國語が教へられ、獨逸語佛蘭西語は樂に覺へ込んだと云ふ。英語もまた十三の誕生日の時から教へられた。後年十二ヶ國語に精しかつたと云ふ彼の驚くべき天才も幼時の教育に負ふ所が多い。これと共に、歴史に對する興味が十三の時公學校に入ると共に湧き出た。然し歴史のみではない。少年としての彼の讀書力は驚異すべきものであつたが、マコウレイ、イエーリング、ミシュレ、トツタベル、ルイ・ブラン等を就讀する事によつて、文學哲學に對する愛著をも懐くに至つたと云ふ。これまさに神童と云ふべきであらう。かくて漸次に、少年時代を卒業して、戦争遊びが軍人の叔父と戦争に就いての議論を交す段階に移り代つて來て居た。

ここに少年時代の事件を種種列べ立てる必要はないが、尙一つ失してはならない事は、彼が更に音樂の天才を惠まれて居た事である。生れ付きの音樂家とも云ふべき彼の才能は、更に母と音樂教師との教育によつて専門家の域に達する程に高められ、音樂を一生の伴侶たらしむるに至つた。妹シマが云つて居る。Paul loved music passionately; he understood it thoroughly, he felt it with all the fibres of his poetic soul. His playing, full of grace, force, expression, and nobility

produced a great impression on the listener.

かくて後年の、歴史に對する世界人的の理解は、藝術家的の素質と共に、少年時代に培はれたのである。一八七一年「基督教の影響に就いて」と云ふ論文を以て公學校を卒業した彼は直ちにモスコウ大學に進んだ。

當時の——一八六〇年代より七〇年代にかけての——ロシアの思想界、殊にモスコウ大學を中心とする思想界は、舊帝政ロシアの專制政治の下に在る社會を、西歐の自由主義的な空氣に解放しやうとする熱に燃へて居た。當時のロシアは、農奴を解放し、地方自治を創設し、裁判所を整備し、獨立せる新聞を創刊し、自治體として大學を再建した、かの「輝やかしき六十年代」の雲圍氣の中に浸つて居た。彼も亦かかる空氣の中に飛び込む事によつて當然に自由主義的となり、また自由主義の祖國たる英國に對する憧憬と興味とを懷くに至つた。當時彼はロシアの將來を明るく展望して居た、一旦かかる軌道に乗つたロシアは、必らずや政治的にも社會的にも西歐先進國の成就した事を完成し得ると信じ、その實現を促進するのが自己の使命と感じて居た。かかる状態に於いて、彼の自由主義は歴史の研究から豊かな内容を攝取しつつ成長して行つた。

大學に於いてはグリーンル教授のゼミナールに於いて、史料の取扱ひ方を學び、中世社會經濟史への興味を更に刺戟された。然しそれにも増して、當時眞に歴

史研究の途を學んだのは遠く異國の二人の大歴史家、ランケ及びトックヴェイルからであつて、彼等の著書の研究より出發して完成した著作が、メロヴィンガー時代に於ける土地財産に關する卒業論文である。この論文は彼の將來の大成を保證するものであつたとともに、彼の念願ベルリンへの遊學を報ひてくれた。學都ベルリンに於いては、令名あるモムゼン及びブルンナーのゼミナールに入り、歴史及び獨逸法の研究に従つたが、その中でも殊に前者に對しては、後年に至つて、彼の一生に於いて科學的精神を喚起せられた主要なものであつた事を感じて居る。その他、獨逸清在中に希臘、羅馬、獨逸の古代史に對する研鑽を重ね、立派な著作を遺して歸國した。それは彼が漸く二十二歳の時であつた。この時代既に彼の中には二つの偉大なる資質が明らかになつて來たと云ふ——法律及び歴史の領域に於ける該博なる見解と、緻密なる古事研究家としての才能と。

獨逸から歸つた彼は直ちに女子大學に於いて歴史を講じ、更に後にはモスコウ大學に中世史の講座を擔當した。それらの講義に於いて彼の博識と明快なる辯舌は、その瀟洒たる風貌と共に、若き學生に深き印象を與へ、その教室をして緊張せしめずには置かなかつた。ここに於いて彼は、一八七八年まで、研究に講義に指導に交友に音楽にオペラに、内容の豊かな愉快の日を送つて居たが、後に學位論文の史料の蒐集は彼を

して、初めての研究旅行に伊太利へ旅立たしめた。

その目的は史料の蒐集にあつた。従つてこの若き學徒はそれ以外の何ものにも目を振らなかつた。見聞するもの悉く或る魅惑を持つと云ふかのベニス風の風物に對しても、彼はただ一日の旅程を割いたに過ぎず、乃ち趣く所は目的地たるフロレンスであつた。フロレンスに於ける彼の生活は文字通り研究への没頭であつた。午前九時より正午まで圖書館で讀書。三時より四時まで記録保存所に於ける研究。續いて伊太利語の會話の練習。續いて伊、獨、露の新聞閱覽。この精進生活に於いては如何なる憂惑も彼をその研究の對象から振り向かせる事は出来なかつた。伊太利への遊學は、もと封建制度の起源を中世社會史の理解の根本問題とする彼が、從來フランクの社會の立場からのみ觀察され來たその制度が、ロンバルディアに於いて如何に在つたかを研究せんとする目的を以てなされたのであるが、その目的は充分に達せられた。彼は豊かな材料を携へて再び故國に歸つた。而して暫くの間はモスコウに於ける兩親の膝下で、主として古代希臘及び中世歐羅巴に就いての講義とその準備、及び歴史的知識の擴大に凡ゆる努力を捧げて居た。

以上の時代までが謂はば彼の準備時代であつて、主として故國を中心に専ら廣範な歴史的知識の吸収と、研究方法の研鑽に努めた時代である。而して豊饒なる土地に蒔かれた優秀なる種子は必ず結實する事が豫想

されて居た。尙この時代の眞摯なる學究生活の間を彩るものは、休日^レに於ける音楽とチェス、休暇に於ける旅行であつて、これらの趣味は一生彼を慰むる伴侶となつた。

英國の學界への登場

ヴィノグラドフ教授の英國の學界への登場、否世界の學界への登場は、一八八三年(三十歳)に初めて英國を訪問した事を以て始まる。この訪問は彼の一生の方向、殊に學者としての方向を決定する上に決定的の影響を與へた。彼の訪英の目的は、英國古代農業時代についての論文の資料を求むる事に在つた。従つて彼は何時もの遊學の場合の如く、直ちにオリジナルの史料に接すべく、公文書保存所^{パブリックレコードオフィス}、大英博物館、牛津、劍橋及びチエルテナム等の圖書館を歴訪し、ここに一年三ヶ月の月日を送つた。この滞在が彼の學的生涯を決定付ける事となつたのだ。

彼が遊學した當時の英國の學界、殊に歴史學界は、政治史のみならず法制史憲法史の領域に於いて既に異常の發展を示して居た。當時までに相繼いで發表せられて居た勞作を跡付けて見ても、そこには、彼の渡英と同年に公刊されたステイヴソンの「英國刑法史」、シーボームの「英國村落共同體史論」、また七五年のスタップスの代表作たるかの「憲法史」、六四年のブライ

スの「神聖羅馬帝國史」、六二年のメイソンの「古代法」等、各々その領域に於ける劃期的の勞作があり、また六五年にはラボック、タイラー、マクレラン等によつて原始文化の研究に黎明が齎らされた。然し乍ら、かくの如き隨を接した雖やかしき研究の發表にもかかわらず、不思議にも記録保存所に在る豊富なる史料その



長 教 フ ド ラ グ ノ イ ヴ

ものは何人によつても明るみに出ざる事なく、また英國普通法の起源と發展は何人もこれを跡付けるものはなかつた。而してこの残された仕事を擔當したのが、初めて英國を訪ねたこのロシアの若き歴史家であつたのだ。

彼は先づ學界を驚かした。僅か二三週間にして、かの

セルデンの死後並ぶ者なき程にブラクトン教本(Placitum Coronatorum)に通曉したこの白面の歴史家は、大英博物館に埋れたる一寫本——それはヘンリー三世時代の最初の二十四年間に於ける二千餘件の判例集であつて、恐らく當時命名ありし司法官ブラクトンの使用のために編纂されたと考へらるる點より特に重要性を有するその寫本——の存在を指摘した。それは實に英國法制史研究上の没却すべからざる發見であつて、この事が彼の學友にして英國法制史に新時代を劃したメイトランドをして「ブラクトン氏備忘錄」の編纂を完成せしむる動機となつた。かゝる貴重な功績を以て始つた彼の英國の學究生活は、當然に交友或は指導者として數多くの著名なる而して眞摯なる學者を持つ事となつた。ここに學者としては多幸なる將來が豫約されたと云つて差支へない。

それらの人人の中には特に吾吾に親しみあるもののみでも、ダイシー、アンソン、ボロック、メイソンの名を數ふる事を得る。然しそれらにもまして、メイトランド及びシーボームの二人の交友を得た事は彼の一生忘るる事の出来ないものであつた。メイトランドとの歴史的會見は五月上旬青葉の牛津の庭園で行はれた。この若き二人の學徒が緑の芝生の上に身を横たへて、心ゆくばかり如何にお互の學識を吐露し會つたか、如何に共鳴したか。またヴィノグラドフによつて、中世英國法制史及び社會史の豊富なる資料が全く埋れて居

る事を教へられたメイトランドが如何に學問的刺戟をこれによつて得たか。メイトランドは自らこの會見によつて法制史の研究に轉向するに至つたと語つて居る程である。二人の親交はその死まで續いて、二人の學問上の刺戟となつた。世の偉大なる學究は常にその一生によき學友を有するが、この二人は正にその最たるものの一であらう。シーボームとの交友もまたこれに劣らぬものであつた。彼は同じ領域に於けるシーボームの凡ゆる見解を承認しなかつたが、彼が立派な獨創的な研究者である事を認め、お互に不足せる點を補ふため、温情に満ちた、然も嚴正な批判をゆるがせにしない交友を續けた。

かかる交友を得つつ彼が一年餘の短期間に牛津に於いて成し遂げた堅實なる仕事の量は驚嘆に値するものであつて、それは漸く三十歳の彼をして歐洲の一流の學者の列に加へしめた一著となつて公にされた。即ち彼の學位論文であり、彼を大學教授たらしめた勞作——然も最初の著書であり代表的の著書である——「英國England 農業史論」である。

當時英國の歴史界は、村落共同體の問題を纏る種々の論争の後、シーボームの「英國共同體史論」の出現によつて一時ロマンニステンの陣營が優勢を示して居た。これに對しゲルマニステンの側に於いてその出現を待望され、然もその期待を裏切る事なく公刊されたのが、彼のこの著述である。それはシーボームの著書

によつて、自由主義的主張の根據に幾分の暗影の兆しをつつあつた英國の輿論に全く感謝すべき結論を與へたものであつた。尤もこの著述は最初は故國に於いてロイヤル出版されたので、その後再三の渡英の後、英國版となつて刊行されたものである。この著書と共に彼の名聲を高めたものは有名なる *Adelard* についての革命的解釋であつた。

かくの如く英國の學界への彼の登場は實に華華しきものであつたが、その後比較研究をすすむべく更にスカンディナビヤを訪れた。この地方への旅行は種々の收穫、殊に古代血縁團體に關する豊富なる資料を齎したが、それにも増して忘るべからざる收穫はルイゼを得た事であつた。後二年、一八九七年に彼はそのルイゼと幸福なる家庭を持つた。

教育に對する熱情

英國農村史に關する輝かしき勞作に對して、彼は當然にモスコウ大學の歴史學の講座と學位を報ひられ、その教授として故國に歸つた。彼が教職に在つて如何に熱心であつたかは、後年の牛津大學に於ける挿話がこれを語つて居る。然しそれと共に彼は教育制度の獻身的な改革者であつて、そのためには職をも犠牲にして顧みなかつた。そこには義人の如き彼の風格がしのばれる。

教育改革に對する彼の熱意の一例は歴史教科書の編

纂である。彼は正しき歴史教育が國民の政治教育の基礎たる事を思ひ、自己の研究を犠牲にして教科書の編纂を完了した。その教科書は一時廣く普及したが、それにもかかわらず、政治的事情に阻まれて長く採用されなかつたが、その事如何にかかわらず、教科書の編纂を片手間の仕事の如く考ふる吾々は彼の誠心の前には頭を上げ得ない。然も一度健全なる普通教育の確立運動に足を踏み入れた彼は、教科書の編纂のみで満足し得られず、進んでモスコウ市會の教育委員會の議長となつた。彼がこの地位に在つて、如何に寢食を忘れて誠實に、然も研究的にその理想のために盡瘁したかは學問に於ける態度と全く變らなかつた。その他教育協會の設立、中等學校の教課の改善、工業智識普及協會に於ける貢獻等、數へ上げれば彼はまた偉大な教育行政家であつた事を示して居る。

然し、これらの社會への貢獻が、自己の本來の研究の非常なる犠牲を伴なつて行はれたものである事を忘れてはならない。彼はシーボームに宛てて、彼が如何に教育事業に於ける困難な開拓者の仕事に従事して居るか、而してその完成のためには如何に當局と抗争しなければならぬか、またその事業の如何に多面的であるか等を述べて訴へて居るが、そこにかう付け加へて居る。「私はこの事を悲痛な心持で申上げたのです。それは私が、如何に自分の學問上の仕事と無關係な考慮や仕事に忙殺されて居るかを示して居ます。然

もかくて、英國やスカンディナヴィヤや西歐の諸問題に關する山のやうな資料が、少しも利用されず、研究者を待ちつつ塵にまみれて居るのです。これは一つの悲惨な状態です。今私の唯一の希望は、ここ二三年の中に解放されて、長く外國に行きたいと思ふ事です。」

然も、それにもかかわらず、一度教育上の缺陷を目撃しては、これに眼を蓋ふ彼ではなかつた。彼は如何に自己の研究が多忙であり、時間を惜む時であつても社會を忘れなかつた。自己の研究の多忙に藉口してその職責に不忠實である事は、如何にその勞作が價値あるものにせよ、それは人間としての尊さを失はしむる。何れが大乗的であるかは問題でない。ヴィノグラドフの態度は、小市民的となりつつある吾々の心に在る學徒と云ふ觀念に多くのものを教へる。乃ち轉じて大學教授としては、彼は大學自治の確立に向つて身を削つて奮闘した。その内容如何は別としてその態度に就いて學むべきであらう。

彼は當時大學教育が國の政情によつて全く支配され、幾多の教授と學生とがその犠牲となりつつある状態に慍感した。大學をこれから救済するため大學と政府との間に種種の抗争が行はれ、その間に在つて彼自身を捨てた努力が拂はれた。その事情は省略するが、その結果度學校騒動が起つた。その一つが起つた時である。當時教授會の議長であつた彼は、その事件の收拾のため、學生と大學當局との間の暫定的取極めを

作るべく努力した結果一策を得た。然しその献策は彼の熱意にもかかわらず頑強なる政府當局の容るる所とならず、また大學の弱點を暴露する事となつた。

この拒絶は遂に誠意の人ヴィノグラドフをしてモスクワ大學との絶縁とモスクワよりの退去を決意せしめた。勿論それは大學の平和のため慎重に行はれたのであり、彼もまた去り難き情を抑へて去つたのだ。然し乍ら、その學識に於いて、社會的活動に於いて、學生間の名聲に於いて、並ぶ者なかつたこの教授の辭職は、豫期したる如く非常なるショックを學生に與へた。モスクワよりの退去に際しては留任運動、デモンストレーションが豫期された。ここに於いて當局者は、その騷擾を避くるため秘かにモスクワを去る事を慫慂したが、彼は犯人の如く去る事を潔よしとせず斷然これを拒否した。出發の日。學生等は停車場への通路やプラットフォームに殺到した。がそのデモは寧ろ靜肅で、それだけ印象深きものであつた。曾てはその存在が大學の輝やかしき名譽であり、然も今はその地位を抛つて頑迷なる専制主義に屈從した大學に對するプロテストのため自ら追放に趣かんとするこの學者の出發を、若き學生等は溢れ出る感情を抑へつつ黙黙として見まもつて居た。靜寂なるデモ、それは劇的光景であつた。

かくて悲痛なる心を懷いてモスクワを去つた彼は第二の故郷英國に赴き、ここに家族と共に居を定めた。

然し英國はむしろ彼を待つて居てくれた。會遊の地であるのみならず、その言語歴史制度に就いて英國人も優つて精通して居る程の彼であつた。然もそこには舊友が温い手を差し伸べて迎へてくれた。ここに再び牛津に於ける彼の學究生活が始つた。

牛津に於けるゼミナール

牛津に於ける彼の再度の學究生活は、一九〇二年に名譽法學博士の學位を授けられた外に、その最初を最も光輝ある名譽を以て飾られた。それは彼が *Corpus Chair of Jurisprudence* に就いた事である。この講座はヘンリー・メインのために開設せられたもので、この講座に坐する者は、各國の法制史及び比較法學の講義及び指導をなし、更に希望によつて一般法律學原理をも講ずる事を認められた歴史的の講座であつて、當時前任者ポロック教授の辭任によつて空席となつて居た。勿論そこには幾多の優秀な候補者が數へ上げられて居た。然も結局、最適任者としてのヴィノグラドフが滿場一致を以て選舉せられた。傳統と格式を誇る牛津大學がこの異國の學究を迎へ容れて最も名譽ある講座を與へた事は、この碩學の人格と學識が如何に衆に絶したものであるかを示す。がそれとともに、また牛津大學が如何に進歩的であり寛大であるかを示すものである。この事に就いてポロックは云つて居る。「牛津は曾てアルベリコ・デエンティレを迎へ容れて以來

の最も美しい事をなした」と。この選挙に對しては一人の非を説へる者もなく、擧つて、このロシヤ人がヘンリー・メインの地位を繼ぐに價する事を承認し、また彼がその在職をして不朽のものたらしむべき事を信じて居た。

人生意氣に感ず。ヴィノグラドフは一生この名譽を忘れず、その寛大を謝した。そして在職中にこれに報ゆる幾多の貢献をなしたのである。彼は一般的には、牛津にコスモポリタンの學風を導き入れる事に努めたが、實際の研究機關としてはゼミナル制度を輸入した。彼は既にベルリンに於いて、またモスコウに於いてゼミナル制度が如何に研究—殊に歴史學の研究にとつて効果多きものであるかを悟つて居た。然しそれが成功するか否かは一つにかかつて指導者の如何にあるのだ。然るに彼は實に牛津に於いて身を以てこれを成功せしめた。その功績の如何に大であつたかは、牛津に於ける法律學の如何なる教授も、また恐らくは歴史學の如何なる教授も、ヴィノグラドフ程に多數の學生をして歴史研究の部門に於いて成功に導いたものはない、と云はるる事によつて分る。

彼の研究方法、徹底さ、法律及び歴史の把握、巨細なる研究に於ける天稟の才能と比較法及び歴史に於ける博識との稀に見る融合—これらの特質がゼミナリステンの間に彼の師としての印象を深く刻み付けた。先づ彼の指導が如何に嚴格であつたかは二三の挿話がこ

れを示して居る。學生の中にはその指導に耐へられず中絶するものもあつた。従つて、その研究題目たる、例へばケルト人に於ける莊園の慣習、年誌の寫本、サリ法典、ドウームズデイ・ブックの經濟統計等の如き難澁なる問題について、彼の指導について行く者は少數ではあつたが極めて熱心なる者のみであつた。彼が要求する所は、誠實に、寸秒も怠る事なく研究に没入する事であつて、怠慢は彼の最も擯斥する所であつた。或時こんな事があつた。いい加減にやつて居たゼミナリステンの一人が、證明書を欲しいと手紙で依頼してやつた。所がそのクラスの次の時間彼はその男を一言に大鳴した。I will give you nothing, nothing, nothing! 隣時も身を惜しまぬ彼は、また學生にもその事を要求したのだつた。然し彼は始めからの智識を要求したのではない。一定の目的と一定の能力さへあれば、豫め智識の不足して居るのは不問に付した。彼が峻嚴であつたのは、うはべだけの、見せかけの仕事に對してであつた。従つてその種の論文が提出された時は、彼はこれを突返して素つ氣なく云ひ切つた。This is all so *garbage* がこれは決して新入生や氣の弱い學生に對してなされたわけではなかつた。

研究指導に於ける嚴格さはまた一般の勞作の批評にも現はれた。例へば或る眞摯なる學問的勞作を或る批評家が愚ろかにも茶化した時、彼はかう云つた。君は僕を極めて無禮な人間と思ふかも知れないが、僕は



偽證罪の話

川並秀雄

偽證の爲す可からざる事は、今にはじまつたことではなく、既に舊約全書に有名なモーゼの所謂十戒の一つ、「汝その隣人に對して、虚妄の證據をたつる勿れ」と教へてある。

然るに、一九〇二年、モルガンといふ人を隊長とする佛蘭西政府派遣發掘隊は、ベルシヤにある古都スーサで、高さ二・二五米、周圍一・九〇——一・六五米の先細になつた墨閃綠岩の石碑が発見された。これこそは、世にも有名な、今を去る四千年以前（キング博士の研究によれば、ハンムラビ王が紀元前二〇八四年と二〇八一年の間に公布されたものであるといつてゐる。キング博士著「バビロニアの歴史」年表による。）に存したハンムラビ法典普通に通にハンムラビ法典と呼ばれてゐるが、アッシリア學者の最近の研究によればハンムラビと呼ぶのが正しいものとされてゐる）であるといふことがフランス

君の批評を以て君らが英國に植へ付ける愚劣さの一例と云ひ度い」と。更に彼の態度を彷彿せしむるのは、或る愚著の出版された時に對して放たれた一言である。It is a mistake, it is a failure, it is a sin. 一言は數千言の批評に代つてその著者を縮慄せしむる。

かくの如く職に任じては獻身的な努力、學問に對しては峻嚴なる態度、それらを見る時、余にも懸絶せる自分等の姿を顧みて反省し三省しなければならぬものを感じる。

然し彼は決して單に冷やかなる指導者ではなかつた。その指導は嚴格ではあつたが、それは悉く學生を鞭撻し向上せしめんとする熱意の現はれに過ぎない。

そのゼミナールに列したオツグは往年を追想して云つて居る。「先生は常に亂りに賞めなかつた。然しそうかと云つて先生の批評は決して不快の念を起させる様なものではなく、そこに含む暗示は極めて役に立ち助けとなつた。ゼミナールの終つた後、先生は一同と親しく膝を交へて語られたが、別れ際には學生らは悉くこれからは全力を傾注しやうと發憤して歸つたものだ。……先生は學生を一人一人見る力―それは學問に對する熱情を燃へ上らせ、鼓舞し指導することによつて絶へずその熱情を導き養へさせまいとする力―を持つて居られた。」

従つてヴィノグラドフのゼミナールからは幾多の俊

英が輩出し、後述の Oxford Studies in Social and Legal History に見るが如き立派な勞作が世に送り出されて居る。かかる勞作の完成を見る事がまた彼の最も喜びとするところであつた。そのゼミナールの精神は今も尙英國に於ける中世研究の精神として遺つて居る。ゼミナール制度は現代の劃一的な大學教育に遺された唯一とも云ひ得べき中世的の制度である。それはギルド的であり私塾的である。眞の師弟の情はそこに生れる。ゼミナールに於ける彼の姿を描くと、信濃飯山の正受庵で來訪した白隱和尚を崖から墮落し、然も或日悟得した彼を歡び迎へたと云ふ惠端和尚の逸話などに知られる禪宗の老師を想ひ浮べる。

この時代の勞作

彼は牛津に教鞭をとる十數年の間に多數の門下生を世に送り出したが、また幾つかのアルバイトをも世界に與へた。「英國農藝史論」の公刊以來十二年の間に「蘇深まり行つた英國中世史への理解は遂に一九〇五年の『マナー發達史』一九〇九年の『十一世紀英國社會史』の二卷となつて實を結んだ。前者は當時次々に公にされたメイトランド、ラウンド、シーボーム等の著書によつて英國古代中世の法制史社會史に關して問題が大體一段落を告げたと考へ、それらを調和適合して發展の主流を示さんとしたもので、その

著名の、アツシリア學者シエイル教授によつて發表された。

ハンムラビ法典といふのは、バビロン第一王朝、第六世のハンムラビ王（2330—2087 B.C.）の王の在位に就ては異論多々存する。私は、ロージャース博士の大著「バビロニア並にアツシリアの歴史」の説を妥當と信するが故に、これに従つた。が、正義の神シャマーシユより授かつたもので、もとは二百八十二箇條あつた筈であるが、第十六箇第七十七行目より第二十三箇まで（法典の内容よりいへば、第六十六條より第九十九條まで）エラム國王シユレルクナフクンテが西紀前十二世紀にバビロニアに侵入し、バビロニアのシツパルの太陽神の神殿に建立してあつたこの碑柱を戰利品としてスーサに持ち歸つた際破損された。碑文銘は楔狀文字のセム・バビロニア語、即ちアツカード語で書かれてある。

この碑柱は、現在巴里のルーブル博物館に所藏され、それと同一の複製品が、英國の大英博物館に陳列されてゐる。ハンムラビ法典は正義の法であつて、國王、君主、高官、貴族等、一切の統治者、支配者の遵守すべき國家憲法で、當時のバビロニア社會生活の規準であつた。

まことにこの發見こそは種々陳重博士がその著、法憲夜話で述べられた如く、海王星の發見の星學に

中心問題として選ばれたものがマナアであつた。然し、それが單なる集大成に非ずして、裁判官の如き犀利なる眼光を以て従來の文献を批判してとり入れ、それと共に豊富なる資料を以て飾つた壯麗なる大作である事は論者の一致して認むる所である。後者は何れかと云へば技術的著述であつて、Domesday Survey に對する註解書——然も不可欠となつた——である。彼の云ふ如く、十一世紀は英國史上の分水嶺であつて、英國の言語法律社會等の根本的特質が一定の形態を探るに至つたのは實にこの世紀に於いてであつた。また本來ならばデンマーク或はノールウェイ的の北歐風の萎縮せる小國となるべき英國が歴史上の英國——ノルマンの征服によつて再びラテンの世界に結合されたテュートンの要素とローマ的要素との結合物たる英國——となつたのはこの世紀に於いてであつた。かくて十一世紀の研究は、歴史家法律學者に對する根本的課題であると。而してこの課題に對する一つの見事な解答を與へたものがこの著述である。

そのほか彼は編纂者又は監修者として種種の貢獻をなした。即ち英國學士院に中世社會史及び經濟史に關する古文書の刊行を進言して自らその任に當り、或はオックスフォードを奮勵して Oxford Studies in Social and Legal History, 9 Vols. を編纂し、或はセルデン協會の法制史料刊行に力を致す等多大の功績を残した。その他小著としては「中世歐羅巴に於けるローマ法」

「法律學一般概論」等がある。これらは小著ではあるが、その方面の蘊奥を極めたる者のみが始めて筆を採り得るものであつて、殊に後者の如きは多くの學者が廣く傑作として推賞措く能はざる所で、決して Common Sense 即ち常識と見る通俗的の著述ではない。

祖國との關係

牛津に在る彼は學問に没頭したとは云へ、愛國の念は失はれたのではなく、祖國の歸趨は常に彼の心中の關心事であつた。即ち日露戰爭の敗北及び内政の變化等を経験しつつある祖國の事は絶えず注視し念頭に置いて居た。もと彼は祖國より追放されたのではなく、大學に對する政府の斷壓に抗するため自ら進んで去つたのだ。従つて專制政府が覆り、政黨殊に自由黨が勝利を得たならば、彼の祖國を去つた理由の一部は消滅する。否、或る友人の如きは、彼を再びロシアに呼び戻し、新政府の文相として迎へ容れんとまでした。そこで彼は一九〇五年の冬ロシアの實狀を見極めるべくモスコウへ出發した。然しその結果は、彼の期待を裏切るもののみで、自由黨ロシアには彼の如き堅實なる憲法上の見解を有する人間を容るる余地はなかつた。同じ事が翌年も繰返されたが結果もまた同じであつた。結局、彼が牛津に於ける學究としての地位を捨ててロシア新内閣の一員として臺閣に列しなかつた事は

於けると同様な貴重な發見であつた。ハンムラビ法典の發見によつて、有らゆる文化科學が見直された。

斯の如き世界最古の法典のうちにも亦この偽證罪が律せられてゐる。

ハンムラビ法典第三條に、「事件ノ審理中、虚偽ノ證據ヲ立テ又ハ彼ノ爲シタル陳述ヲ確實ニセザル者ハ、若シ其ノ事件ガ生命ニ關スルモノナレバ其ノ者ハ死刑ニ處セラルベシ」とあり、更に第四條に、「穀物又ハ金錢ヲ收賄シ、不正ノ證據ヲ立テタル者ハ、其レガ爲メニ生ゼル損害ヲ賠償セザルベカラズ」とある。

古代バビロニアに於ける裁判の方法は、訴が提起せられると、事件は常に、證據に基いて審理され、其の證據方法としては、人證、書證及び物證は共に許されてゐた。

證人の宣誓は、特種の儀式を以て、寺院等で行はれ、宣誓の標識として、神旗を擔ふと言ふ様な事も行はれた。これは、當事者と證人に、神の力に對する恐怖心を生ぜしめて、實體的眞實發見の目的を達しやうとするものであつて、其の由來は、古來バビロニアに行はれた傳説に基くものであるといふ説がある。

兎に角、古代バビロニアに於ても、裁判の嚴正といふ事を企圖し、審理中の事件に對して、偽證を立

明らかに啓明の事であつた。と共にそれは吾々にとつても幸福の事であつた。然し當時モスコウ大學より再三の懇請のあつた講義に對しては、既に米國に於てさへこれを行つた彼としては無下に拒絶する事は出来なかつた。かくて彼は繁忙な時間を割いて毎年一回母校の教壇に立つた。そこには然し、母や妹らに毎年顔を合はせると云ふ楽しみがあつた事も一つの理由である。然しこの講義も結構三回で中止された。と云ふのは昔と同様なる斷崖が再び下されたからである。彼は去るに就いて云つた。「余は勿論、教職員が政府の一片の辭令によつて即座に辭職を強要せらるるが如き大學に教鞭を採る事を望まない」と。かくて彼は一九一二年再び平和なる牛津の人となつた。

晩年、死

吾々は彼の經歷を辿りつつその風貌を描いて來たが、漸く一九一一年である。彼の死までには未だ豊富なる十四年の歲月が殘されて居る。多くの紙面を費す事を許されない吾々は筆を急がう。

彼の晩年はその世界人的の爲人が完成しつつあつた時代である。またその時代に歐羅巴の政治と社會を改造した世界大戦が起り、その衝動によつて惹起されたロシア革命、ロマノフ王朝の廢絶、共產黨政府の成立等ロシアにとつては歴史的の事件が續發した。彼は祖

國の民衆がこの狂へる計劃に對して何等の好意も持たず關係も持たないと思つて居た。然し結構その信頼が誤りであり、ボルシェビキが支配權を掌握した事を知つた時、彼はロシアを捨てると云ふ悲痛な決心をした。それは祖國ロシアを捨てたのではなくて、共產黨ロシアを捨てたと云つていい。かくて彼は一九一八年に第二の故郷英國の市民となつた。ロシアを愛し、スラヴ精神を誇りとし、その將來を信じて居た彼にとつては、かかる結果は悲痛以外の何ものでもなかつた。然もそれと共に、故國に在る多くの財産は沒收されて、英國に於ける彼の家計も縮少する事を余儀なくされた。

然しロシアとの絶縁は他面に於いて彼を逃生せしめた。それは彼の世界人的人格と勞作とを生んだ。晩年に至つて、或は印度を訪問し或は米國に渡り、或はその他各國を歴訪して該博なる知識を吸收すると共に、英、佛、獨、伊、ノールウェイ語をマスターし、更にその他數ヶ國語に對する研鑽に務めた。それらの凡ゆる努力の合一した結果の所産が「歴史、法、學、大綱」であつて、それは第一卷「序論、種族、法」、第二卷「希臘都市の法律」の二卷を上梓したままで永遠に中絶されてしまつたが、彼の構想では尙第三卷以下に教會法及び封建法、個人主義法學、社會主義法學等を取扱ふ計畫があつたと云ふ。その完成された時の壯觀と學界に對する裨益を想ふ時、彼の長逝は如何に惜しまれても尙足りない。この勞作と共に學ぐ

てたり、無責任な陳述を爲した者は、嚴重な制裁を受け、體刑に處せられ、若し其の事件が生命に關するが如き、重大なるものは、死刑に處せられたのである。(早大遊佐法學博士、早稻田法學 P. 31-32 參照)

◇

印度アリアン族が、印度に侵入して、其の特有の文化を形成し始めたのは、西紀前千二百年頃であつたといはれてゐる。

農耕的社會生活が始まり、統制ある生活が開始せらるると共に、不文の法制が必要となり、不文の法制は慣習を認定し、是正し、又は否定したのである。社會生活の愈々進むにつれ、慣習を反省して新たな觀念を樹立するに至り、この新觀念が順次法制を産み出した。

其れ等の古法典のうちに、司法だけを説いてゐる法典にナーラダといふのがある。

此のナーラダ全典にも又、偽證罪が規定してある。

先づ判官は證人を集め、偽證を爲さざるやう、起誓して證言せしめる。

證人は、事實の儘に證言を爲すべきこと、眞實の證言を爲す者は、現當二世に大利を得べきこと、偽證を爲す者は、生々世々蓄積せる一切の善行の果を減するのみならず、一切の大罪の果報を受ける、法

べきはデュ・カンデユの辭典の校訂である。これは萬國歴史學大會に於いて、彼にその主任を囑託せられた仕事であつて、言語學者に非らざる彼がこの大任に推舉せられた事はその信頼の如何に大なりしかを示して居る。然も一旦その責を引受けた彼は専心これに傾倒し、その辭典をして單にデュ・カンデユの校訂に止まらず、完璧なる中古羅典語辭典たらしめんとした。福田博士が渡歐して彼に面會したのはこの頃であつて、博士も當時の彼の苦心慘憺たる努力の様子に接して感に打たれた事を述べられて居る。

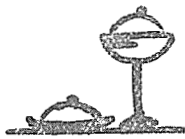
かくて彼の晩年は牛津を中心として、専念に一生の大作と永久的の學界への貢獻に没入して居た時であつて、平和な幸福な日が続いた。

然るに不圖した運命が遂に彼をこの世界から奪ふ日が來た。それは一九二五年の秋、その「歴史法學大綱」によつて彼の學界への功績を認められたパリ大學より名譽博士の授與を受くるため渡佛した事であつた。その式は十一月の末、歐羅巴の大學の母と云はるるソルボンヌの大講堂で立派に行はれたが、彼はその後モ巴里に滞在して、羅馬に行く計畫などを考へて居た。その中ふとした事から風邪に犯さる事となつた。然るにそれがもとで、氣管枝炎となり肺炎となり、遂に十二月十九日の朝、凡ゆる手當の甲斐もなく、この碩學は巴里の客舎でこの世を去つた。日本流に數へて七十二歳

であつた。その葬送はロシヤ教會で、佛蘭西の學友や多數のロシヤの學生の參列の下に嚴かにとり行はれた。そして遺骨は生前最も懐しんだ牛津に送られ、ハウリウエルに葬られた。

その墓誌は彼の選んだままにかう書かれてある。
心ひろき ぶりたにあに 謝する とつくにのま
らうど ここにねむる

HOSPITAE BRITANNIAE GRATUS
ADVENA. (一〇・三・一八)



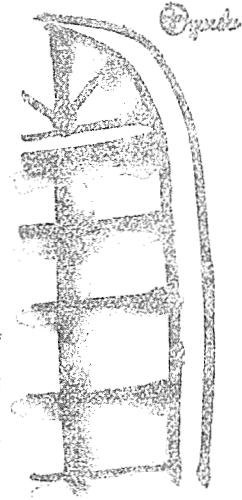
のみ、世界を維持し得る旨を訓戒する。
唯事實の證言が、四姓族の死を來すべき場合に限り偽證が許され、此の時は、偽證せる者は辯才天を祭り、又は其の他の方法で消罪する事を要する。
疾病でなく證言を言はない者は、事件に責任を負はしめられる。

證言を述べた後一過問以内に、疾病、火事、死等が起る時は、偽證者と認定せられる。

偽證が爲された時は、其の事件を裁決しない。偽證の動機は、貪欲、迷妄、恐怖、友情、愛欲、忿怒、無智、幼稚等であるが、順次、初めに擧げたものが重く、偽證者は、事件の性質に應じて、罰金と追放とに處せられる。但し、婆羅門は、追放せられるだけで、收賄して偽證する者の罪は更に重い。(中野義照氏著「印度思想法制思想」五頁並に七二頁參照)

罪に問はれたものが、できるだけ言ひ逃れやうとしたり、種々複雑な利害關係から、偽證を立てることがある。弱き我々人間のあさましき姿である。しかも、此れは、今も昔も變らない。

英國歴史學派の創始者サムエル・メイソンの「古代法」、或は獨逸社會學派の鼻祖ルドルフ・フォン・イェリング著の「羅馬法の精神」を見れば、嘘が法律進化の仲介者たる役目をつとめてきたことを説いてゐる。



學内報

卒業證書授與式

本學學部第十一回卒業證書授與式は三月二十日午後二時より千里山學舎威徳館に於て、専門部第一部第三回、専門部第二部第四十七回卒業證書授與式は同日午前十時より天六學舎講堂に於て舉行した。卒業證書授與の後、仁保學長の懇篤なる式辭、文部大臣、大阪府知事、大阪市長及來賓、校長總代の祝辭の後、學生總代の答辭ありて式はいとも嚴肅盛大であつた。卒業生氏名並に受賞者氏名別項の通り。

仁保學長式辭

本日は遠路にも拘はりませず來賓各位には御臨席を賜りまして誠に感謝に堪へませぬ、本年度卒業生は學部二五九名、専門部一部は二一七名、専門部二部は五四一名合計一、〇一七名の多數でありまして、過去卒業者數を通算致しますれば一萬有餘となり、本學逐年の隆昌はこれ偏へに教職員並に校友諸子の御聲援に依るものと深く謝意を表します。ここに本學の概況を申上ぐれば天六學舎の増築も大體竣成いたし、これを以て本部並に圖書閱覽室に充て、過般火災に罹りました

豫料の校舎も既に復舊工事に着手し、出來得べくんば來年の三月一杯迄には完成いたしたき希望を以て着々工を進めております。次には學部本館も改築の時季に當面して今や内容の新充實の必要を痛感するの秋、新校友としての諸子に一言祝辭を述べて送別の辭となし、一面希望を陳べて各位一層の母校に對する同情を切望する次第であります。

諸子が三年乃至六年の間、その健康を良く保たれ、而して本日茲に無事卒業せられし事は滿腔同慶に堪へない、今茲に諸子を校門より送るにあたり、諸子の前途は一喜一憂であり、決して樂觀は許されてはゐないのであります。即ち諸子は今迄自力更生てふ言葉が農村の疲弊にのみ使用されてゐたが、現在では諸子自身の上にもふりかかつてゐる事を自覺して、今日只今より卒業者となりし以上は當然自力に依つて生活を建て直す様專念せらるる事を御祈りいたします、些さか自己の所懐とする所を忌憚なく披瀝すれば、他方に依らずして自力に依るには先づ自力を充實する、即ち自己の缺點を知つて之を補助し、冷靜な立場から人格價値の批判をする事が必要であります。その人格價値批判の標準としては諸子も既に入學の際、長く本大學の學則を熟讀せられた事と思ひますが、學則第一條に「本大學ハ法律、政治、文學、經濟及商業ニ關スル學術ノ理論及應用ヲ教授シ、並ニ其纏與ヲ政究スルヲ以テ目的トシ、兼テ人格ノ陶冶、國家思想ノ涵養ニ留意スルモノトス」となつて居ります。その第一は實力養成であります。諸子は今これを標準として自己の實力を反省する事であり、諸子は夫れノ専門の學術を研究され、或は學術の蘊奥を究める事に精進されては

來ましたが、私自身の卒業當時の體驗に依りますと、恐らくは諸子自らも尙前途に幾多の修養を積まねばならない事にお氣付きでありませう。日進月歩、この生存競争の場裡に立つて自己訓練を怠たる者は必然的に落伍者とならねばなりません。第二は人格の陶冶に就いて、實業界が諸子に期待する處は學術の優良を望む事は勿論ながら、より以上に人格を望んでゐないでせうか、前者の足らざるはこれを急に補足する事が出來ませうが、後者は急にこれをなし得ない、勉學と云ひ、人格の修養と云ひ、人間一生の仕事であつて、強固なる意志をもつて慌てず焦せらず進まれる事が肝要であります。人間陶冶の方法としては「禮儀を良くせよ」と主張したい、即ち禮儀を強調して虚心坦懐、お互の人格を尊重し合へば山鹿素行先生の「禮は己に出でて己に返る」との格言の通り、自己の人格を認めらる素因となるのであります。第三は國家思想の涵養と云ふことであり、國家思想の涵養は國體觀念を明確にするに云ふ事でありまして、國體觀念のない人は日本臣民として將又國民としての義務を忘却せし者と云つて過言ではありますまい。過般の貴衆兩院ならびに樞密院に於ての波及問題は、私の批判として研究の自由及び學問の獨立とは云ひ乍ら、わが國の國體は既に憲法、皇統典範に依り一日厥然であつて、今更云々するの餘地はない、而してかりそめにも社會の秩序安寧を省みざる學說の發表は、臣民たり國民たる以上執るべき道でないと思つて居ります。私の立場としては獨逸のカントと同一であつて、自己の確信を取り消すべき事は卑しむべきではあるが、併し沈黙を守るべきであると思ふ。諸子は外國法を取り入れ又はそれ等

を加味した學說に感はされず、即ち以上の三標準に照らして自己の長所短所を反省し、自重自愛せられ行事を切に希望する次第であります。以上を以て本年卒業式の式辭といたします。(文責記者)

學部校友總代祝辭

本日茲ニ第十一回卒業證書授與ノ式典ヲ舉行セララルニ當リ我々校友亦參列ノ榮ヲ得タルハ衷心欣快ニ堪ヘサル所ナリ。

顧レハ本學ハ其ノ前身關西法律學校トシテ明治十九年創立セラレテヨリ年ヲ閱スルコト正ニ五十年、大學令ニ據ル大學ニ昇格シテヨリ既ニ十有四年學運年ト共ニ隆昌ニ赴キ卒業生ヲ輩出スルコト一萬二千、幾多ノ人材ハ各方面ニ活躍シツツアリ。

諸君ハ多年秀麗ナル學園ニ在リテ學ノ纘與ヲ究メ、人格ヲ練磨シ、以テ學ノ實化ノ選士トシテ今方ニ實社會ニ進出セラレントス、諸君ノ前途洵ニ多幸ナリト謂フヘシ。

今我カ國ハ一九三五、六年ノ危機ニ直面シテ内外多事、有爲ノ人材ヲ俟ツコト大旱ニ雲霓ヲ望ムカ如シ此ノ非常時局ニ際シ、我々ハ新進氣鋭ノ諸君ヲ迎フルハ百萬ノ力ヲ得タルノ感アリ、希クハ諸君世界ノ大勢ト皇國ノ使命ニ縈ミ協心戮力以テ國難打開ノ衝ニ當リ小ニシテハ本學ノ爲メ、大ニシテハ國家社會ノ爲メ貢獻セラレントコトヲ茲ニ校友ヲ代表シ聊カ蕪辭ヲ述ヘテ祝辭トナス。

專門部校友總代祝辭

本日茲ニ關西大學專門部卒業證書授與ノ式典ヲ舉行セララルニ當リ校友ヲ代表シテ一言祝辭ヲ陳フルハ最モ欣快トスル所ナリ。

(上) 千里山風徳窟に於ける學部總代祝辭
(下) 天六學舎に於ける專門部卒業證書授與



卒業生諸君、諸君

ハ本學ニ入り各其ノ專門ノ學科ヲ研鑽セラルルコト正ニ三星霜今ハ嚴雪ノ功成リ母校ノ門ヲ出テ實社會ニ活躍サレントス洵ニ慶祝ニ堪ヘス。

惟フニ方今ノ時局ハ極メテ多事多端ニシテ國ノ内外ヲ擧ケテ所謂非常時ニ直面シ諸君ノ活躍ニ期待スル所又大ナルモノアリ諸君ノ責務ヲ蓋シ重大ナリトイフヘシ
希クハ諸君、ヨリ今日ノ時局ヲ認識シ、多年研鑽セラレタル學理ヲ活用シテ社會國家ノ爲メニ貢獻シ併セテ本學ノ名聲ヲ顯揚セラレントコトヲ、一言陳ヘテ祝辭トナス。

學部卒業生總代 阪克巳 答辭

本日茲ニ私達ノ爲メニ學部第拾壹回卒業證書授與ノ式典ヲ舉行セラレルニ當リ多數朝野貴紳先輩諸彦ノ御臨席ヲ忝ワシ且ツ學長閣下ノ御懇篤ナル訓辭ト來賓諸賢ノ御鄭重ナル祝辭ヲ賜リマシタコトハ私達ノ最モ光榮トスル所テアリマリス。

回顧スレハ本學ニ入學致シマシテヨリ茲ニ數星霜其ノ間學徳高キ學長閣下ヲ始メ諸先生ノ御懇切ナル御指導ト不斷ノ御蒞臨ニヨリマシテ私達非才ノ身ヲ以テ今日卒業ノ榮譽ヲ荷フニ至リマシタコトハ誠ニ私達卒業生一同ノ深ク感謝スル所テアリマリス。

惟フニ邦家ノ現狀ハ内ニ於テハ政治經濟並ニ思想界共ニ誠ニ憂慮スヘキモノアリ外ニ於テハ國際諸問題亦多事多難ニシテ所謂一大非常時局テアリマリス。

斯ノ如キ多事多端ノ秋ニ際シ私達ハ本學ヲ辭シ實社會ニ出テテ多年研鑽ノ實ヲ學ケ以テ是ノ難局ニ處セントスルモノテアリマリス、然シ乍ラ私達ハ資性愚鈍學未タ淺ク殊ニ經驗乏シク能ク此ノ責務ヲ完ウシ得ルヤ否ハ危懼ノ念ナキヨリ得マセン唯此上ハ一意學長閣下ノ御訓誨ヲ遵守シ諸先生ノ不斷ノ御蒞臨ヲ體シ時流ヲ追ハス時弊ニ傲ハス實質剛健不撓不屈ノ精神ヲ以テ夙夜精勵シ之ノ重任ヲ完ウセン覺悟テアリマリス。

願クハ先輩諸賢ノ御指導ト諸先生並ニ在學諸君子ノ御鞭撻ニ依リマシテ之ノ重責ヲ盡サ

七 千歳キ庶イト右シマス。

茲ニ卒業生ヲ代表シ聊カ感謝ト覺悟ヲ述ヘテ答辭ト致シマス。

専門部第一部卒業生總代植村藤市答辭

本日茲ニ生等ノ爲ニ専門部第一部第三回卒業證書授與ノ式典ヲ舉行セラレ多數貴紳先輩諸彦ノ御臨席ヲ忝ウシ且學長閣下並ニ來賓諸賢ヨリ懇篤ナル御訓辭ト優渾ナル御祝辭トヲ賜フ寔ニ生等ノ身ニ餘ル光榮ニシテ感激措ク能ハサル所ナリ。

願レハ生等本學ニ入りテヨリ已ニ三星霜ソノ間學長閣下並ニ諸先生ノ不斷ノ御指導ト光輝アル學風ノ薰化トニ依リ生等ノ菲オヲ以テシテ尙能ク今日ノ榮譽ヲ擔フ生等何ヲ以テカ之ニ酬ヒン。

今ヤ本學ノ校運年ト共ニ隆盛ヲ加ヘ將ニ五十周年ノ慶典ヲ迎ヘントスルニ當リ生等慈父ト仰キシ恩師ノ膝下ヲ離レ思出深キコノ學園ヲ後ニシテ各ソノ所信ニ向ツテ邁進セントス然レトモ生等ノ行方ニハ或ハ實社會ノ荒波或ハ修學ノ峻險ナル道横ハリ加フルニ皇國ノ現狀ヲ通觀スレハ内外共ニ多事多難ニシテ徒ニ拱手傍觀スヘキ時ニ非ス國ヲ舉ゲテ舊起ヲ要スヘキノ非常時ニシテ生等ノ責任モ亦重大ナルモノアルヲ感スコノ時ニ際シ生等ノ薄學淺才ヲ以テ能クコノ重任ニ堪エ得ルヤ頗ル危懼ノ念ナキ能ハスト雖モ生等只一意學長閣下並ニ諸先生ノ日頃ノ御訓諭ト本學ノ精神トヲ胸ニ刻ミ肝ニ銘シテ忘レズ粉骨碎身國難ノ打開ト國威ノ宣揚トニ微力ヲ致シ以テ鴻恩ノ萬一ニ酬ヒ本日ノ榮譽ニ背カサルコトヲ期ス。

希クハ先輩諸賢ノ一層ノ御鞭撻ヲ賜ハラシコトヲ茲ニ卒業生一同ニ代リ聊カ蕪辭ヲ述ヘテ答辭トナス。

専門部第二部卒業生總代山本昇答辭

鶯花清和ノ本日ヲトシ愛ニ生等専門部第二部卒業生ノ爲メニ第四十七回卒業證書授與ノ式典ヲ舉行セララルニ方リ朝野貴賓並ニ先輩諸彦ノ御實臨ヲ仰キ學長閣下ノ御懇篤ナル御訓辭ト來賓諸賢ノ御叮重ナル御祝辭ヲ辱ウスルノ光榮ニ浴セルハ生等ノ感激措ク能ハサル所ナリ。

回顧スレハ生等光輝燦然タル歴史ヲ有スル本學ニ入りシ日ヲ仍ホ昨ノ如ク覺ユルモ騷隙ヲ過クルニ似テ既ニ三星霜ノ歲月ヲ閱セリ此ノ間生等専ラ宣誓ノ本旨ヲ體シ毎ニ向上ノ精神ヲ持シ刻苦精勵以テ勉學ニ志ヲ臻セリ然レ共生等資性固魯鈍自ラ省ミテ之カ達成ヲ危懼シ居タリシニ克ク今日ノ成果ヲ收メ卒業ノ榮譽ヲ擔ヒ得タル所以ノモノハ偏ニ學長閣下ヲ甫メ諸先生ノ眞摯熱誠ナル御教化ト先輩諸賢ノ御懇切ナル御指導ノ賜ニシテ生等其恩贊ニ對シ轉々景仰感謝ノ念ヲ禁シ得サルナリ。

抑々本校ノ濼騰ハ疾ク明治十九年法曹先覺者數氏ノ創立ニカカリ爾來星霜幾變遷幾多ノ英才俊髦ヲ輩出シ國家社會ニ貢獻スル所極メテ大ナルモノアリ今ヤ生等此ノ榮エアル學園ノ業ヲ卒ヘ或ハ實社會ニ出テテ活動シ或ハ更ニ進ミテ學理ノ蘊奧ヲ究メントス。

惟フニ方今時局愈々多事多端ニシテ世ヲ舉ゲ忠孝ノ大義ニ徹スヘキ人士ノ輩出ヲ待ツモノ切ナリ此ノ秋ニ當リ先哲ノ遺業ヲ承ケ邦家ノ興隆ヲ助長スヘキ生等ノ責務タルヤ眞ニ九鼎大呂ヨリモ重且大ナルヲ覺悟セサルヘカラス但々憾ムラクハ生等凡庸菲オニシテ能ク此重責ヲ全ウシ得ルヤ憂懼ナキ能ハスト雖モ一度ヒ此ノ光輝アル本學ノ歴史ト國家ノ非常ナル難局ニ想到スレ

ハ感奮興起ノ念自ラ湧然タルヲ覺ユ、然レハ生等學長閣下並ニ諸先生ノ御訓誨下温古知新ノ校是ヲ服膺シ先輩各位ノ御教導ニ遵ヒ櫛風沐雨日夜拮据屢勉シ以テ高邁ナル國民精神ニ立脚シ益々先蹤ヲ恢弘シ誓ヒテ本日ノ榮譽ヲ曠シクセサランコトヲ期ス生等豈敢々努力シテ鴻恩ニ奉體スル所ナカルヘケンヤ。

冀クハ學長閣下ヲ甫メ諸先生並ニ先輩諸賢ニ於カレ將來共備ヲ御温情ヲ垂レ給ヒ深ク御誘掖御鞭撻相賜ラシコトヲ。

茲ニ卒業生一同ヲ代表シ聊カ蕪辭ヲ陳ヘテ答辭トナス。

入學試驗施行

本年度入學試驗は左記期日に施行した。

- 學 部 四月五日
- 第一豫科 四月八日及九日
- 第二豫科 四月十日及十一日
- 専門部第一部 四月六日
- 専門部第二部 四月三日

學 部 名 改 稱

本學經濟學部は經濟學部と改稱し學科課程變更方支部首に申請中のところ、三月二十三日附にて認可ありたり。因に新制學科目は別項の如し。

法文、經商學部長改選

法文、經商兩學部長は任期満了に付各教授會に於て互選の結果左の如く當選就任した。

法文學部長 教授 武内省三氏
經商學部長 教授 正井敬次氏

教員異動

嘱任

法文學部講師(戰時國際公法)	河原 政勝氏
同(國際私法)	川上 太郎氏
經商學部講師(外國經濟事情)	和田 信夫氏
同(日本經濟史)	菅野和太郎氏
同(經營經濟論)	村本 福松氏
同(外國經濟事情)	下田 將美氏
同(統計學)	蛭川 虎三氏
大學豫科講師(英語)	富山 四郎氏
同(佛語)	三木 治氏
專門部講師(民法總則)	石田文次郎氏
同(行政各論)	渡邊宗太郎氏
同(民事訴訟法)	小野木 常氏
同(民事訴訟法)	中田 淳一氏
辭任	
法文學部講師	齋藤 武生氏
同	財部 靜治氏
大學豫科講師	安井 源雄氏
專門部講師	大隅健一郎氏
同	谷口 知平氏
同	森口 繁治氏

通常協議員會

昭和九平には通常協議員會は三月十四日午後四時より大六學舎本部會議室に於て開催された。新築落成の本部を巡觀の後協議に移り-

- 一、昭和九年度追加豫算承認の件
- 一、昭和八年度追加豫算承認の件
- 一、昭和十年度豫算承認の件
- 一、理事監事任期満了につき改選の件
- 一、豫算及決算については原案を承認、理事監事の改選については満場一致重任に決定した。

理事及監事氏名

理事	喜多村桂一 郎氏
同	仁 保 龜 松氏
同	吉 田 音 松氏
同	増 山 忠 次氏
同	玉 木 三 郎氏
同	黒田 莊次郎氏
監事	武 田 宣 英氏
同	内 藤 正 剛氏

豫科校舎新築起工

昨平十二月燒失にかゝる千里山豫科校舎の復興計畫はこの程總工費約三十萬圓の豫算も協議員會の協賛を得、グラント東南につゞく丘陵七千坪を京阪電鐵會社より買収し、いよいよ着工した。

新校舎は建坪千二百坪鐵筋コンクリート三階建にして窓多く、千里山學園に相應はしき白聖の明朗なる設計で、明春三月竣成の豫定である。

而して八百人を收容し得る大講堂をはじめ、二百人を收容し得る階段特別教室、雨天體操場の外教室十五豫科長室、教授室、會議室、研究室、事務室等がある尚グラント南の豫科假校舎は豫科本館新築竣工移轉の上千里山學友會館として學友會の本部とする豫定である。

配屬將校の更迭

大學豫科並に專門部第一部配屬將校は左の如く異動ありたり。

專門部勤務	歩兵第八聯隊附 中佐 小林秋夫氏
大學豫科勤務	歩兵第八聯隊附 中佐 織田正一氏
因に前任阿部洞二郎中佐は第四師團司令部付に轉補され、岩田信爾中佐は大佐に昇進待命被仰付らる。	

住所移動及動靜

本莊鐵次郎氏(豊能郡池田町室町十番丁) 赤羽豊治郎氏(豊能郡豊津村垂水、千里山花壇前住宅)

小林 秋夫氏(專門部) 大阪市天王寺區細工谷町五

織田 正一氏(豫科) 三島郡吹田町二ツ池町一七

八

増山理事嚴父 本學理事増山忠次氏嚴父は三月三十日郷里山口縣阿武郡高俣村にて逝去さる

經商學部新制科學課程表

科學業商				科學濟經			
合	計	第一學年		第二學年		第三學年	
		科目	時數	科目	時數	科目	時數
合	計	必經科目	二	必經科目	二	必經科目	二
		簿記	二	簿記	二	簿記	二
		商業史	二	商業史	二	商業史	二
		經濟學	二	經濟學	二	經濟學	二
		民法	二	民法	二	民法	二
		英語	二	英語	二	英語	二
		統計學	二	統計學	二	統計學	二
		社會學	二	社會學	二	社會學	二
		英語經濟研究	二	英語經濟研究	二	英語經濟研究	二
		統計學	二	統計學	二	統計學	二
		刑法學	二	刑法學	二	刑法學	二
		佛語、佛語ノ内	二	佛語、佛語ノ内	二	佛語、佛語ノ内	二
合	計	必經科目	二	必經科目	二	必經科目	二
		簿記	二	簿記	二	簿記	二
		商業史	二	商業史	二	商業史	二
		經濟學	二	經濟學	二	經濟學	二
		民法	二	民法	二	民法	二
		英語	二	英語	二	英語	二
		統計學	二	統計學	二	統計學	二
		社會學	二	社會學	二	社會學	二
		英語經濟研究	二	英語經濟研究	二	英語經濟研究	二
		統計學	二	統計學	二	統計學	二
		刑法學	二	刑法學	二	刑法學	二
		佛語、佛語ノ内	二	佛語、佛語ノ内	二	佛語、佛語ノ内	二
合	計	必經科目	二	必經科目	二	必經科目	二
		簿記	二	簿記	二	簿記	二
		商業史	二	商業史	二	商業史	二
		經濟學	二	經濟學	二	經濟學	二
		民法	二	民法	二	民法	二
		英語	二	英語	二	英語	二
		統計學	二	統計學	二	統計學	二
		社會學	二	社會學	二	社會學	二
		英語經濟研究	二	英語經濟研究	二	英語經濟研究	二
		統計學	二	統計學	二	統計學	二
		刑法學	二	刑法學	二	刑法學	二
		佛語、佛語ノ内	二	佛語、佛語ノ内	二	佛語、佛語ノ内	二

加ヲ語國外ハ又先研書濟經語英ハ目科擇選
定選テ於ニ始ノ年學上以目科三共年學各ヘ
シベ經ヲ認承ノ長學シ

目科三共年學各テヘ加ヲ語國外ハ目科擇選
經ヲ認承ノ長學シ定選テ於ニ始年學ヲ上以
シベ

昭和十年三月卒業成績優等並
佳良賞受領者

<p>大學豫科修了成績佳良賞受領者</p> <p>第一豫科 宮本弘、須藤榮一、女國定一、太田金二、清水三雄、松岡貞數、遠浦義郎</p> <p>第二豫科 松島精一、池上正三、近藤二郎、青木四郎</p>	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>優良</td> <td>經濟學部經濟學科</td> <td>森 妙 次</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>專門部第二部法律學科</td> <td>山本 貞造</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>專門部第二部國語漢文專攻科</td> <td>後藤 連雄</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>法文學部法律學科</td> <td>小阪 克己</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>同</td> <td>田中 敏夫</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>哲學專攻科</td> <td>中村 常興</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>經濟學部商業學科</td> <td>上野 其吉</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>同</td> <td>谷口 靜雄</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>專門部第一部經濟學科</td> <td>植村 藤市</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>商業學科</td> <td>黒川 義美</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>同</td> <td>榎木 義男</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>專門部第二部法律學科</td> <td>馬淵 文夫</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>商業學科</td> <td>金子 馨一</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>國語漢文專攻科</td> <td>新田 長次</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>同</td> <td>近藤 正義</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>英語專攻科</td> <td>坂口 兵司</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>同</td> <td>菊地 守三</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>同</td> <td>森田 芳郎</td> </tr> </table>	優良	經濟學部經濟學科	森 妙 次	同	專門部第二部法律學科	山本 貞造	同	專門部第二部國語漢文專攻科	後藤 連雄	同	法文學部法律學科	小阪 克己	同	同	田中 敏夫	同	哲學專攻科	中村 常興	同	經濟學部商業學科	上野 其吉	同	同	谷口 靜雄	同	專門部第一部經濟學科	植村 藤市	同	商業學科	黒川 義美	同	同	榎木 義男	同	專門部第二部法律學科	馬淵 文夫	同	商業學科	金子 馨一	同	國語漢文專攻科	新田 長次	同	同	近藤 正義	同	英語專攻科	坂口 兵司	同	同	菊地 守三	同	同	森田 芳郎
優良	經濟學部經濟學科	森 妙 次																																																					
同	專門部第二部法律學科	山本 貞造																																																					
同	專門部第二部國語漢文專攻科	後藤 連雄																																																					
同	法文學部法律學科	小阪 克己																																																					
同	同	田中 敏夫																																																					
同	哲學專攻科	中村 常興																																																					
同	經濟學部商業學科	上野 其吉																																																					
同	同	谷口 靜雄																																																					
同	專門部第一部經濟學科	植村 藤市																																																					
同	商業學科	黒川 義美																																																					
同	同	榎木 義男																																																					
同	專門部第二部法律學科	馬淵 文夫																																																					
同	商業學科	金子 馨一																																																					
同	國語漢文專攻科	新田 長次																																																					
同	同	近藤 正義																																																					
同	英語專攻科	坂口 兵司																																																					
同	同	菊地 守三																																																					
同	同	森田 芳郎																																																					

本學年度學科目擔任表

法文學部

◇法律學科

社會學、社會政策	岩崎卯一
經濟政策概論	磯部喜一
東洋倫理學	石濱純太郎
獨語	板倉鞆音
法理學	仁保龜松
債權總論、獨法	西村信雄
英法、債權各論、信託法	木莊鉄次郎
佛語	賀來俊一
國際公法(戰時)	河原政勝
國際私法	川上太郎
哲學	武内省三
英語	高田彬
經濟原論	高田保馬
海商法	武田藏之助
手形法	竹田省
英語	田邊信太郎
西洋倫理學	龍野健次郎
行政法總論、行政法各論	中谷敬壽
獨法	鳥賀陽然良
商法總則、合社法	野村次夫
獨法、商行為	柳瀬兼助
佛語	山田正三
民事訴訟法(判決)	
(強制執行)	

◇政治學科

法制史	牧健二
民法總則	近藤英吉
英法	安藤光
獨語	赤羽豐治郎
民事訴訟法(判決)破産法	齋藤常三郎
憲法、行政法各論	佐々木惣一
刑法各論	佐伯千復
佛法、親族法、相続法	木村健助
刑法總論、刑事訴訟法	宮木英脩
財政學	森下政一
國際公法(平時)	末廣重雄
物權法	末川博
社會學、社會政策	岩崎卯一
工業政策、經濟政策概論	磯部喜一
政治史	池田榮
東洋倫理學	石濱純太郎
獨語	板倉鞆音
法理學	仁保龜松
債權總論	西村信雄
債權各論、信託法	本莊鉄次郎
佛語	德尾俊彦
外國政治書研究	大山彦一
佛語	賀來俊一
國際公法(戰時)	河原政勝

◇文學科哲學專攻科

國際私法	川上太郎
政治學史	吉田一枝
哲學	武内省三
憲記(原理、簡案)	瀧澤喜子雄
經濟原論	武田鼎一
英語	高田彬
統計學	蜷川虎三
海商法	武田藏之助
手形法	竹田省
經濟史、英語	田邊信太郎
西洋倫理學	龍野健次郎
行政法總論、行政法各論	中谷敬壽
商法總則、合社法	鳥賀陽然良
商行為	野村次夫
政治學、外國政治書研究	黑田覺
法制史	牧健二
民法總則	近藤英吉
獨語、農業政策	赤羽豐治郎
商業政策	作田莊一
憲法、行政法各論	佐々木惣一
刑法各論	佐伯千復
親族法、相続法	木村健助
刑法總論	宮木英脩
財政學、地方自治	森下政一
國際公法(平時)	末廣重雄
物權法	末川博
社會學、社會政策	岩崎卯一
政治史	池田榮

◇文學科英文學專攻科

古典語	泉井久之助
心理學、心理特種問題	岩井勝次郎
文學概論	堀正人
倫理演習、社會學特殊問題	大山彦一
西哲思想史、哲學史特種問題、宗教學特種問題	片山正直
哲學、論理學、論理特種問題	武内省三
哲學特殊問題	高山岩男
經濟原論	高山保馬
東洋倫理學	高瀬武次郎
倫理學、西洋倫理學	龍野健次郎
美學	辻部政太郎
行政法總論	中谷敬壽
政治學	黑田覺
文明史	矢日孝次郎
印度哲學、宗教學	前田聽端
獨語、哲學演習	藤本進治
憲法	佐々木惣一
教育學、教授法	三枝樹正道
東洋哲學史、東洋哲學特種問題	新町徳之
國文學	鳥田退藏
哲學講義、認識論、西洋美	菅守常
支那文學	石濱純太郎
獨語	板倉鞆音
言語學、ラテン語	泉井久之助
心理學	岩井勝次郎
文學概論、英文學	堀正人
英文學	細江逸記

佛 語 德尾俊彦
佛 語 賀來俊一
英文學 瀧川規一
英文學 辻部政太郎
英文學 村上喜貞
英文學 內多精一
英語學 グレン・シヨウ
文 明 史 矢口孝次郎
宗 教 學 前田 聰
獨 語 赤羽豐治郎
教育學、教授法 三枝樹正道
國 文 學 島田退藏
西洋美術史 菅 守 常

經 商 學 部

◇ 經 濟 學 科

社會學、社會政策、經濟演習(社會問題)
經濟政策概論、工業政策策
經濟學研究
政治史
經濟學史
東洋倫理學
獨 語
商 行 爲
債權總論
民法總則、信託法
佛 語
外國經濟事情
佛 語
賀來俊一

會計學 加藤金次郎
日本經濟史 菅野和太郎
英語經濟學研究、交通政策 河村宜介
國際私法 川上太郎
憲法、行政法總論、行政法各論、政治學史、經濟演習(社會問題) 吉田一枝
簿記(原理、商業) 瀧澤喜子
經濟原論、經濟演習(經濟論) 武田 鼎
哲學 武內省三
損害保險論 武 內 省 三
統計學 瀧 谷 善 一
手 形 法 蜷 川 虎 三
西洋倫理學 竹 田 省
經濟史、經濟演習(經濟商業史) 龍野健次郎
經濟地理 田邊信太郎
經營經濟論 中村良之助
商法(總則、會社) 村本福松
倉庫論 鳥賀陽然良
保險論(總論、生命)保險政策 野村次夫
政治學 野口正造
殖民政策 黑田 覺
貨幣論、英語經濟學研究外國爲替、經濟演習(銀行及金融)金融論 山本美越乃
取引所論 正井敬次
經濟學史、經濟演習(經濟學史) 增山忠次
海 商 法 古 川 武
獨語、農業政策 安 藤 光
破 產 法 赤羽豐治郎
商業政策、國際經濟論 齋藤常三郎
作田莊一

◇ 商 業 學 科

刑法各論
親族法、相続法
刑法總論
外國經濟事情
會計學、商工經營論
交通政策
國際私法
憲法、行政法總論、行政法各論、經濟演習(社會問題)
社會學、社會政策、經濟演習(社會問題)
經濟政策概論、工業政策
東洋倫理學
獨 語
商 行 爲
債權總論
民法總則、信託法
佛 語
外國經濟事情
佛 語
商業英語、商品學
貿易實務論
日本經濟史
會計學、商工經營論
交通政策
國際私法
憲法、行政法總論、行政法各論、經濟演習(社會問題)

佐伯千伎
木村健助
宮本英脩
下田將美
森 下 政 一
森 川 太 郎
末 廣 重 雄
須 藤 文 吉
陶 山 誠 太 郎
岩崎 朔一
磯 部 喜 一
石濱純太郎
板倉 鞆 音
原田鹿太郎
西村信雄
本莊鐵次郎
德尾俊彦
和 田 信 夫
賀來俊一
賀屋俊雄
菅野和太郎
加藤金次郎
河村宜介
川上太郎
吉田一枝
簿記(原理、商業)、商學概論、英語經濟學研究、經濟原論、財政學、景氣變動論、經濟演習(經濟論) 瀧澤喜子
損害保險論 武田 鼎
統計學 川 谷 善 一
手 形 法 蜷 川 虎 三
西洋倫理學 竹 田 省
經濟史、商業史、經濟演習(經濟商業史) 龍野健次郎
經濟地理 田邊信太郎
經營經濟論 中村良之助
商法(總則、會社) 村本福松
倉庫論 鳥賀陽然良
保險論(總論、生命)保險政策 野村次夫
經濟學史、經濟演習(經濟商業史) 野口正造
殖民政策 山本美越乃
貨幣論、外國爲替、金融論經濟演習(銀行及金融) 矢口孝次郎
取引所論 正井敬次
經濟學史 增山忠次
海 商 法 古 川 武
獨語、農業政策 安 藤 光
商業政策、國際經濟論 赤羽豐治郎
破 產 法 齋藤常三郎
作田莊一
刑法各論 佐伯千伎
親族法、相続法 木村健助
商業英語 水谷 揆 一
刑法總論 宮本英脩
外國經濟事情 下田將美
英語經濟學研究、經濟演習(財政學) 森 下 政 一
銀行論、經濟演習(銀行及金融) 森 川 太 郎

民法(物權)
國際公法(平時)
簿記(銀行、工業)
合計 監査

大學 豫科

◇第一大學豫科

國語 飯田正一
英語 入島治一
獨語 堀正人
英語 木庄實
佛語 富山四郎
佛語 德尾俊彦
英語 小川忠藏
佛語 大小島眞二
論理 和田豊二
法制 賀來俊一
佛語 河村信一
數學、自然科學 河村宜介
經濟 田邊清市
英語 武内省三
哲學 中村眞之助
獨語 中村鄧次郎
地理 內藤耕次郎
心理 向軍治
獨語 上島勝夫
英語 山田松太郎

漢文 日本史、東洋史、西洋史
修身 藤澤章次郎
英語 三枝樹正道
佛語 水谷揆一
佛語 杉平頸智

◇第二大學豫科

國語 飯田正一
英語 入島治一
佛語 堀正人
佛語 德尾俊彦
英語 小川忠藏
佛語 大小島眞二
論理 賀屋俊雄
佛語 賀來俊一
佛語 加藤金次郎
數學、自然科學 河村信一
經濟 河村宜介
英語 田邊清市
哲學 武内省三
獨語 中村眞之助
地理 中村鄧次郎
心理 內藤耕次郎
獨語 村上喜貞
西洋史 向軍治
西洋史 村田敷之亮
英語 上島勝夫
英語 矢口孝次郎

英語 山田松太郎
英語(英文法) 安田恭平
漢文 藤澤章次郎
日本史 小泉幸治
法制 安藤光
修身 三枝樹正道
佛語 水谷揆一
獨語 三木
國語 溝江亮一
獨語 新町德之

專門部第一部
◇法律學科

社會學 岩崎卯一
債權總論、契約、事務管理 西村信雄
英語 西村勝太郎
心理學 西村嘉三郎
佛語 德尾俊彦
商行為 大橋光雄
民事訴訟法 小野木常
支那語 與平定世
法學通論、英語 和田豊二
倫理學、哲學概論、英語 片山正直
佛語 加藤金次郎
國際公法 川上敬逸
憲法 吉田一枝
保險法 武田藏之助
行政總論、行政各論 中谷敬壽
民事訴訟法 中田淳一

會社法 鳥賀陽然良
刑法各論 植田重正
商法總則 野村次夫
民事訴訟法 山田正三
論理學 柳延胤
國際私法、親屬法 柳瀬兼助
經濟原論 古川武
獨語 赤羽豐治郎
海商法、手形論 安藤光
刑法總論 佐伯千仞
破產法 齋藤常三郎
相續法 木村健助
物權法 柚木馨
英語 水谷揆一
刑事訴訟法 宮本英翁
民法總論 宮本英翁
財政學 森下政一
英語 杉平頸智

◇經濟學科

社會學、社會政策 岩崎卯一
經濟政策、工業政策、英語 磯部喜一
英語 西村勝太郎
心理學 西村嘉三郎
佛語 德尾俊彦
政治學 大山彦一
支那語 與平定世
民法總論、債權法 和田豊二
倫理學、哲學概論 片山正直
佛語 加藤金次郎

憲法	吉田一枝	民法總則、債權	和田豐二	社會學	岩崎卯一	民事訴訟法	箕田正一
經濟原論	武田鼎一	倫理學、哲學概論	片山正直	物權法	入江真太郎	刑法總論	宮本英箭
商業通論、商業政策	瀧澤喜子雄	商業簿記、佛語	加藤金次郎	論理學	井上隆澄	財政學	森下政一
保險論	瀧谷善一	海上保險	河村宜介	民法總則	石田文次郎	民事訴訟法	關豐馬
經濟地理、交通論、英語	中村良之助	商業、英語	賀屋俊雄	社會法、商行為法	原田鹿太郎	債權契約	末川博
海外經濟事情、英語	中川庸太郎	商品學	河村信一	心理學	西村嘉三郎	哲學概論	菅守常
特殊經濟史	宇治伊之助	經濟原論	武田鼎一	刑事訴訟法	富田仲次郎	英語	鈴木富太郎
商法	國藏胤臣	商業通論、商業歷史、商業政策	瀧澤喜子雄	法學通論	和田豐二		
經濟史	矢日孝次郎	保險論	瀧谷善一	親族法、相続法	和田于一		
論理學	柳延胤	商業地理、交通論	中村良之助	行政各論	渡邊宗太郎	社會學、社會政策、農業政策、經濟政策、工業政策、樞民政策	岩崎卯一
農植政策	山木美越乃	海外經濟事情、商業英語、倉庫稅關論	中川庸太郎	佛語	加藤金次郎	論理學	磯部喜一
外國貿易、外國爲替	正井敬次	商法	野村次夫	國際公法、獨語	川上敬逸	心理學	井上隆澄
取引所論	增山忠次	論理學	國藏胤臣	憲法	吉田一枝	經濟原論	西村嘉三郎
經濟學史、英語	古川武	外國貿易、外國爲替	柳延胤	英語	田邊清市	債權法	堀經夫
獨語	赤羽豐治郎	取引所論	正井敬次	手形法	田中保太郎	政治學	茶谷勇吉
海商法、手形法	安藤光	英語	增山忠次	保險法	武田健之助	獨語	大山彦一
破產法	齋藤常三郎	手形法	古川武	倫理學	龍野健次郎	民法總則	與宮精一
統計學	菊田太郎	破產法	赤羽豐治郎	行政總論	中谷敬壽	佛語	和田豐二
物權法	柚木馨	商業數學	安藤光	物權法	竝山興道	英語	加藤金次郎
英語	水谷揆一	破產法	齋藤常三郎	商法總則	村上喜真	商法	河村宜介
財政學	森下政一	英語	木村禎橋	民事訴訟法	野村次夫	英語	神宅賀壽惠
銀行及金融論	森川太郎	財政學	水谷揆一	刑法各論	野中徹	國際私法、佛語	川上敬逸

◆商業學科

經濟政策、工業政策、英語	磯部喜一	銀行及金融論	森下政一	專門部第二部	須藤文吉
商業英語、會計、英文簿記、英語	西村勝太郎	銀行簿記、工業簿記、原價計算	森川太郎	◆法律學科	
心理學	西村嘉三郎				
佛語	德尾俊彦				
支那語	奧平定世				

破產法	岩崎卯一	民事訴訟法	箕田正一
債權總論、事務管理	入江真太郎	刑法總論	宮本英箭
海商法	井上隆澄	財政學	森下政一
獨語	石田文次郎	民事訴訟法	關豐馬
經濟原論	原田鹿太郎	債權契約	末川博
國際私法、佛語	西村嘉三郎	哲學概論	菅守常
經濟原論	富田仲次郎	英語	鈴木富太郎
海商法	和田豐二		
獨語	和田于一		
破產法	渡邊宗太郎		
	加藤金次郎		
	川上敬逸		
	吉田一枝		
	田邊清市		
	田中保太郎		
	武田健之助		
	龍野健次郎		
	中谷敬壽		
	竝山興道		
	村上喜真		
	野村次夫		
	野中徹		
	山田卯三郎		
	柳瀬兼助		
	古川武		
	安藤光		
	赤羽豐治郎		
	坂本憲三		
	齋藤常三郎		

◆經濟學科

商業通論	岩崎卯一	社會學、社會政策、農業政策、經濟政策、工業政策、樞民政策	岩崎卯一
保險論	磯部喜一	論理學	磯部喜一
倫理學	井上隆澄	心理學	井上隆澄
手形法	西村嘉三郎	經濟原論	西村嘉三郎
商業政策	堀經夫	債權法	堀經夫
交通論	茶谷勇吉	政治學	茶谷勇吉
商業通論	大山彦一	獨語	大山彦一
民法總論	與宮精一	民法總則	與宮精一
佛語	和田豐二	佛語	和田豐二
英語	加藤金次郎	英語	加藤金次郎
商法	河村宜介	商法	河村宜介
志法	神宅賀壽惠	志法	神宅賀壽惠
交通論	川上敬逸	交通論	川上敬逸
商業政策	吉田一枝	商業政策	吉田一枝
手形法	吉川貫二	手形法	吉川貫二
倫理學	龍澤喜子雄	倫理學	龍澤喜子雄
保險論	田中保太郎	保險論	田中保太郎
商業通論	龍野健次郎	商業通論	龍野健次郎
	高田彬		高田彬

經濟地理、英語	中村良之助	海上保險、英語	河村宜介	國民道德、實踐倫理、東洋史	一海景宥	英語專攻科	飯田正一
海外經濟事情	中川庸太郎	物產法	神戶三郎	論理學	井上隆證	國民道德、實踐倫理、東洋史	飯田正一
英語	內多精一	商法	神宅賀壽惠	漢文、支那哲學史	石濱純太郎	國語	一海景宥
特殊經濟史	宇治伊之助	交通論	古川貫二	言語學	泉井久之助	論理學	井上隆證
經濟史	矢口孝次郎	經濟原論	武田鼎一	心理學	西村嘉三郎	言語學、獨語	泉井久之助
佛語	柳瀬兼助	商業通論、商業政策	瀧澤喜子雄	漢文	西田長左衛門	心理學	西村嘉三郎
外國貿易、外國爲替	正井敬次	手形法	田中保太郎	漢文	上橋文夫	英語	所勇
取引所論	增山忠次	倫理學	龍野健次郎	英語	茶谷忠治	英語	豐岡佐一郎
經濟學史、英語	古川武	保險論	瀧谷善一	文學概論	大坪一	佛語	德尾俊彦
海商法	安藤光	商業地理	中村良之助	法學通論	和田豐二	文學概論	小川忠藏
物產法	坂本憲三	海外經濟事情、商業英語	中川庸太郎	經濟原論	河村宜介	英語、英作文	和田豐二
破産法	齋藤常三郎	英語	村上喜貞	國語	金子實英	憲法、法制史	河村宜介
統計學	菊田太郎	英語	內多精一	憲法、法制史	吉田一枝	經濟原論	吉田一枝
財政學	森下政一	倉庫稅關論	野村次夫	國文法	吉澤義則	憲法、法制史	吉田一枝
銀行及金融論、英語	森川太郎	商業歷史	矢口孝次郎	漢文、支那文學史	高橋盛孝	英語	田邊清市
哲學概論	菅守常	佛語	柳瀬兼助	英語	辻部政太郎	漢文	高橋盛孝
英語	鈴木富太郎	外國貿易、外國爲替	正井敬次	國語	山脇毅	英語	村上喜貞
經濟政策、工業政策	磯部喜一	取引所論	增山忠次	國史、西洋史	山川信夫	英語	內多清市
論理學	井上隆證	破産法	古川武	國語	安川安太郎	英語、英文法	山田松太郎
商業英語	西村勝太郎	商業數學、會計學、英文簿記	齋藤常三郎	漢文、漢作文	藤澤章次郎	英語、英文學史	山田松太郎
心理學	西村嘉三郎	財政學	木村禎楠	有驗故實、國語	江馬務	國史、西洋史	安田恭平
英語	豐岡佐一郎	銀行及金融論、英語	森下政一	國語學	佐伯梅友	國史、西洋史	山川信夫
債權法	茶谷勇吉	銀行簿記、工業簿記、原價計算	森川太郎	教育學、倫理學	三枝樹正道	會話	三枝樹正道
獨語	奧宮精一	哲學概論	須藤文吉	國語、國文學史	新町德之	國語學史	三枝樹正道
民法總則	和田千一	英語	菅守常	漢文	篠田栗夫	漢文	篠田栗夫
商品學	河村信一	英語	鈴木富太郎	國語	平林治德	發音學、英語史	杉平顯智
商業簿記、佛語	加藤金次郎	國文法	飯田正一	哲學概論	菅守常	哲學概論、獨語	菅守常



校友

校友總會並に懇親會

關西大學校友大會並に新校友歡迎懇親會は、三月二十一日午後五時より大阪中央公會堂に於て開催した。此の日意氣揚々と集まる新校友三百八十餘名、落語、萬才の餘興に興じたる後、午後六時より開會、會長仁保學長の挨拶ありて校友會常議員の改選に移り、恒例の如く會長指名に一任の後、宴に移つて祝杯を挙げ、學歌の合唱、學生歌の高唱にさしもの大ホールも歡樂のルツボと化し、關西大學萬歳を三唱して盛會裡に閉會したのが午後八時半であつた。

因みに當日改選の常議員は左記の諸氏である。
飯田清藏、岩崎卯一、原田鹿太郎、戸波次郎、小笠原語咲、岡田清作、遠部逸太郎、加藤金次郎、谷岡登、高梨乙松、武田藏之助、内藤正剛、野口政次郎、野崎勇次郎、八木孝三、松本芳太郎、藤本孝雄、三島律夫、白砂直樹、森川太郎

千里山學士會春季總會

三月二十日卒業式當日午後六時より田箕橋大ビル入階に於て、仁保學長を初め岩崎、水谷兩學部長、玉木

専務理事其他多數恩師の御臨席を仰ぎ、本年度卒業生歡迎會を兼ね千里山學士會總會を開催した。定刻各卒業年次別に席に着くや織田理事長に代つて加藤理事の挨拶あり宴に入る。忽にして千里山在學當時そのままの忌憚なき快談堂に溢れ、和氣霽々の裡にデザートが始り、學長先生の御懇篤なる御教訓と御希望とを承る更に舊會員を代表して大塚理事本會の主旨現狀に就いて述べ、續いて押谷君新會員を代表して謝辭を述べらる。最後に聲高らかに學歌を合唱し、學長先生の發聲にて關西大學萬歳、玉木専務理事の發聲にて千里山學士會の萬歳を三唱し、午後九時頃散會した。

當日理事選舉の結果次の諸氏が來年度千里山學士會理事として選出された。

補正臣、森捨次郎、加藤金次郎、角田好太郎、柏元孝治、神保敏男、中村良之助、佐野登喜雄、戸張昇樞木信雄、森田重壽、大塚重太郎、本田末一、高岡武夫、的場市郎、吉川敬一、森儀三郎、佐伯三郎、春原源太郎、長谷川稔、久松鹿治、大島武夫、廣田弘應、細川末藏、北川久男、近藤喜慶、島更孫十郎、津田弘、押谷忠之(卒業年度順)

東京支部例會

三月十七日比谷三信ビル内東洋軒に春季總會を兼ねた懇親會を開催した。今回は珍しき校友の出席多く母校隆昌の近況を悦び、創立五十年記念の計畫を談じ所感を陳べ久瀧を語り、興趣津々たるものがあつた。

當日出席者

武田宣英、久門商利、大月義平二、守安富太郎、吉

藤浩平、高橋喬一、永田宗太郎、森塚圭城、上村重雄、岡本四郎九、貴志房廣、志野覺治郎、中村峰藏、阿部正實、山口直三郎

愛媛支部

第九回總會

校友會愛媛支部では今回支部長佐藤義道氏が郷里岡山縣へ歸られるので其の送別會を兼ねて、第九回總會を三月三日午後二時から松山市三番町「しきしま」に於て開催した。當日は主賓佐藤義道氏

(辯護士)、竹内虎治郎氏(宇和島區檢事)、鈴木春季氏(今治區檢事)、加藤敬之氏(蓮福寺住職)、市村敏夫氏(愛媛縣統計主事補)長陸友市氏(愛媛新報社文藝部長)で定刻市村幹事開會の辭を兼ねて佐藤支部長送別の辭があり、之れに對し佐藤支部長の謝辭あり、續いて長陸常務幹事より前年度會計報告、大學の現況報告あり後任支部長推薦問題が出たが次期改選迄留保し其間支部長事務は常務幹事が取扱ふことに決定して開宴一同學生時代の昔話や、旭日昇天の勢にある母校の現況等に花を咲かせ午後七時母校の萬歳を三唱して解散した

動靜

高木 敏夫君(大八 専法) 辯護士事務所を天王寺區上木町七丁目七九に開設

矢野 國臣君(夫一一専商) 滿洲國慶審銀號經理に就任

住所奉天省遼源縣城

嶋崎 良雄君(昭二 専法) 平塚遞信分掌局監督課勤務

住所平塚府船橋里二七

青木 太郎君(昭四 専法) 滿洲電信電話會社新京事務所より同會社天管理處に轉勤、住所奉天彌生町

四七

栗本 義重君(昭八 専二法) 辯護士、住所東區島町一丁目二坂本憲三法律事務所

山下 薰君(昭九 専二法) 德島歩兵第四十三聯隊第七中隊に入營

上田 通倫君(明三四 法) 昭和十年三月二十二日逝去

平野 橋一君(昭三 大經) 昭和十年三月十日逝去

坪井 重清君(昭七 大法) 昭和十年三月二十六日逝去

住所移動

古田吉五郎君(明三九 法) 東京市澁谷區青葉町二〇

(電青出七四七七)

櫻岡 角郎君(明四四 専法) 門司市宗利町一丁目

山上 千城君(天五 専商) 門司市明治町四丁目

安井 榮三君(天七 専法) 和歌山市八番丁八

辻本 安石君(天二 専法) 東京市荏原區中延町四九〇

原 仙吉君(天二 専法) 東京市麹町區大手町一ノ六

木村 恂三君(天一 四大法) 住吉區駒川町五丁目一五

米良貫一郎君(昭二 専法) 東京市澁谷區柏木三ノ三

泊 勗君(昭二 専法) 北河内郡守口町土居(昭二)一

銀島 萬作君(昭三 専法) 天王寺區上木町七丁目五七

岡本 龍三君(昭三 専法) 奉天彌生町四七、風雲莊

下村 監佐君(昭三 専商) 住吉區澤之町三五〇

河本 尙君(昭四 大法) 北區堂島濱通一丁目一〇

(電北五九七六)

藤井梅太郎君(昭五 専法) 東京市澁野川區澁野川町一八五二

三宅 和夫君(昭六 大專法) 姫路市綿町三一ノ一、神戸商運姫路營業所

嵯木 必君(昭九 大專法) 福岡區田川郡糸田村明治齋業會社豐國鑛業所

川島 一尾君(昭七 大法) 兵庫縣明石郡垂水町舞子

牛尾 右三君(昭七 専經) 東區内淡路町一丁目一九、伊地智齒科醫院内

中江 巽君(昭八 大法) 東澁川區十三東之町二ノ三

村上嘉一郎君(昭八 大法) 西宮市森具蓮毛七九四

大西 義雄君(昭八 専二經) 兵庫縣武庫郡其元村伊子志

中西 嘉人君(昭九 大法) 住吉區帝塚山中五丁目一

向井 克己君(昭九 専二法) 鹿兒島縣薩摩郡佐志村廣瀬

改姓名

(舊)

昭八 專二經 田中 義雄

昭五 大經 西田 順道

(新)

大西 義雄

西田 裕亮



國文學會(專門部)

▲昭和九年度最終例會 三月三十一日(日)午後六時から心齋橋明治屋三階ホールに於て本學年度最終の例會を開催した。當日は懇親茶話會の形式で、中等教員無試験檢定問題を中心話題として話を進め、新町會長、江馬、飯田、安川の諸先生から種々意見の開陳並に注意事項があり、結論として、此際執るべき道は

- 一、卒業生並に在學生が文檢を受験して實力を發揮すること。
- 一、學校、教員、學生が三位一體となつて努力すること。
- 一、專任教員を増加すること。
- 一、出席率を高め各學期試験を施行すること。
- 一、試験答案を批判し、研究すること
- 一、活版本は相當備はれるも、木版本玻璃版本を備へること。

等にて、昨の失敗を省みて、奮起の意
氣は場に漲つてゐた。それから境界消
息談にうつり、愉快に閉會したのは午後
十時であつた。

出席者——新町會長、江馬、飯田、安川
の教授諸氏を初め校友及在學生十五名。

計理クラブ

第二十四回例會

日時 二月十六日午後六時

場所 大阪ビル計理經營學會會議室

演題並出題者

一、會計監査について 木村 續橋氏

第二十五回例會

日時 三月二十三日午後六時

場所 大阪ビル計理經營學會會議室

演題並出題者

一、和議會計 青木倫太郎氏

二、Couchman: Uniform of Accountant for Industry. 久保田音二郎氏

學生

天六學友會

岩田教官送別會

專門部第一部配屬將校として二年有餘の
間專門部學生の教練指導に多大の御盡力
を賜りたる岩田先生は去る三月の陸軍異
動に伴ひ圖らずも專門部教官を御退任に
なりたるに付き我天六學友會委員會は先
生の御在任當時に於ける絶大なる御功績
を記念する爲茲に天六學友會の名に於て

先生に對し記念品贈呈致し其の送別の宴
は去る三月二十三日午後五時半より戎橋
筋森永に於て開催した。當日は學年末に
て御多忙中に拘らず諸先生並に先輩諸兄
の御列席を得、且春季休暇中にも拘らず
多數在阪委員の出席をみたる事誠に有意
義であつた。斯くして先生との名残りを
惜みつゝ最後に岩田先生の御健康と御清
榮を祝して午後九時宴を閉じた。

(近藤君報)

基督教青年會

本學部出身櫻井兄の立教大學神學部を
卒へられ目出度く教界に献身せらるゝ事
を記念して在學生卒業生合同の懇親會を
三月十八日五時半より天滿教會集會室に

於て開催、喜まれたる和やかな數時間を
共にし、先輩諸兄の種々在學生を激勵せ
らるゝ所あり、新に、關大基督教青年會
(會長片山先生)以外にオール關大卒業生
より成る關大O.B.基督教青年會を組織し
會長に櫻井氏を推し幹事諸淵見、會計室
地見とし、毎年例會を催す事等決定、九時
半讃美歌合唱、櫻井兄の祈禱に閉會す。
本年度の幹事左の如し。

木下 清、尾崎 政明

參陵會(專門部第一部)

第二十六回例會——去る二月三日、

京都西南金閣寺花園方面に舉行す。午前
七時四十分大阪驛に集合し、八時五分出
發す。京都にて河村宜介先生、久保田先
生外二名と合す、市電にて千本北大路に
向ふ。途中、般舟院陵に參拜す。それよ
り、三條天皇陵に參拜し、金閣寺を拜觀
す。次に花山天皇陵に參拜し、平野神社
北野天滿宮に參詣す。その附近で晝飯を
攝り、正午其處を出發す。二條天皇陵に
參拜し龍安寺に參詣す。此處で暫く河村
信一先生の御講話を拜聽す。道は峻しく
なり、宇多帝陵に至る。山を下る頃京都
にあり勝ちな小雨降り來る中を彼の有名
な仁和寺に參詣す。光孝天皇陵を経て、
圓融天皇陵に至る頃小雨は止んだ。雲間
より太陽が照り、全く小春日和の様な暖

かさだ。足を延ばして、村上天皇陵に參
拜し、更に勇を披して、文德天皇陵に參
拜す。三時三十分鳴瀧驛に至り、一同解
散す。

當日參加者——岩田會長、河村、
可野、久保田諸先生、青木、中岡、飯尾
小石、大野、貴志、矢吹、戸澤、黒田、
緒方、林、笠原、山内、中島、山本、一
般參加者平井の諸君

第參週皇居及大廟遙拜——一月二

十八日(月曜日)參加者會員十四名、一般
學生一名、三十日(水曜日)參加者會員二
十名、一般學生一名、三十一日(木曜日)
(但二月一日(金曜日)から三年生が休み
となるので繰上げ)參加者會員十八名、
一般學生二名。

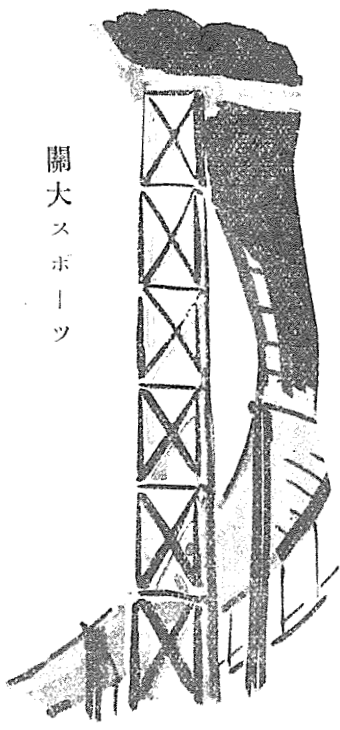
第四週皇居及大廟遙拜——二月四

日(月曜日)參加者八名、一般學生二名。
六日(水曜日)參加者五名、一學生一名、
八日(金曜日)參加者六名一般學生一名。

第五週皇居及大廟遙拜——二月十

三日(水曜日)參加者六名、一般學生一名
十五日(金曜日)參加者九名、一般學生一
名。

會員の參加は勿論一般學生の參加を大
いに希望致します。



關大スポーツ

野 球 部

クラブ對抗戦 三月十七日、甲子園球場にて次の二試合を舉行。

對駿臺クラブ

關大ク (0020010000) 3
駿臺ク (000020400A) 6A
バッテリイ (關大) 本田、西村、熊田
(駿臺) 中村、野村、矢野

對市岡クラブ

市岡ク (0000000000) 0
關大ク (00101014A) 7
バッテリイ (市岡) 伊達、川村
(關大) 西村、岡本

クラブ對鐵道局戦 三月二十二日、甲子園球場にて左の試合を舉行す。

對門司鐵道局

門鐵局 (0000000000) 0
關大ク (030013002A) 9A

對名古屋鐵道局

名古屋 (0301000000) 4
關大ク (0020000000) 2
バッテリイ (名古屋) 森、中橋
(關大) 北井、岡本

關西六大學リーグ春季スケジュール

三月十六日午後六時、大阪美津濃運動具店にて春季總會開催の結果、左の如く決定發表された。

- 4月20日 入場式 (十一時)
- 關大—京大 (正午) 甲子園
- 4月21日 關大—京大 (二時半) "
- 5月4日 關大—關學大 (正午) "
- 5月6日 關大—關學大 (二時半) "
- 5月11日 關大—立命大 (二時半) "
- 5月12日 關大—立命大 (正午) "
- 5月16日 關大—神商大 (二時半) 西京橋
- 5月19日 關大—神商大 (正午) "

籠 球 部

クラブ對抗リーグ優勝

大阪YMCA會員籠球リーグ試合にて連戦連勝、第一位を關大クラブにて獲得す。

對 REXク戦、三月四日
關大ク 40—33 REXク
於大阪YMCAコート

對大阪商大OB戦、三月九日
關大ク 35—32 大商大OB

對GBク戦、三月十六日
關大ク 37—32 GBク

對大丸ク戦、三月二十三日
關大ク 50—46 大丸ク

拳 闘 部

比島遠征安藤選手歸朝

マニラのカーニバル祭に招かれて、他の四選手と共に健闘、美事三年連敗の不成績を一蹴し

5月29日 關大—同大 (二時) 甲子園
5月30日 關大—同大 (二時) "
尙、決勝試合は第二次試合の翌日舉行
對明治大學定期戦 本學對明治大學定期野球戦は、今春より三回戦舉行の事となり、三月三十日發夜行にて本學チームは東上、四月一日、二日、三日に亘り神宮球場にて銚を交ふる事となつた。

比島遠征選手歡迎試合

全日本ならびに全關西アマチュア拳闘聯盟主催にて比島遠征選手歡迎の日本代表對全關西アマチュア選抜對抗拳闘大會を、三月二十一日午後三時より甲子園庭球場内特設リングにて舉行。

對抗試合はいづれも無判定のため、引分けとなった。

- フライ級 安藤(關大) 對 大山(OAC)
- バンタム級 青木(日大) 對 平岡(關大)
- フェザー級 永松(明大) 對 飯野(關大)

陸上競技部

關大OB對市立運動場クラブ

三月十七日午後一時半より、大阪市立運動場にて、關大OB對大阪府市立運動場クラブとの試合舉行。

- 運動場クラブ 58—56 關大OB
- 百米11秒1大島(關) 砲丸投11米41南(運) 走巾跳6米86大島(關) 千五百米4分32秒堀尾(運) 高障15秒6大島(關) 走高跳1米65大島(關) 槍投45米64若口(運) 五千米17分37秒李萬(運) 二段跳14米12大島(關) 四百米57秒森(運) 圓盤投31米37植山(運) 四百米穩走46秒3(運)



雙楠舍坪内先生筆新町(載)

逝ける

坪内逍遙大人

新町徳之

春寒むの、昭和十年二月二十八日午前十時三十分といふに我が國文藝學界の耆宿でジエキスビヤ研究の最高峰、文學博士坪内逍遙大人は熱海の双

楠舎で永眠せられ、双楠院始終逍遙居士となられた。天下、知ると知らざるとを問はず皆な一様に之を痛惜し之を愛惜して止まない。

顧ふに我が逍遙大人の現代文學史上に残された偉大な業績は多方面に亘つてゐるので、これを細叙することは紙数のゆるさぬことである。がその業績の尤も著しいものは

- 一、新文學論の提唱
- 二、國劇の革新
- 三、文藝批評
- 四、ジエキスビヤ研究
- 五、文藝教育者

であることは誰しも承認する處であらう。

明治文學の黎明期にいち早く「小説神髓」・「書生氣質」を著して新文學論を提唱し、文學革新の曉鐘を鳴されたこと。「桐の一葉」・「牧の方」を始め多くの史劇をもつて國劇の向上に献身の誠をいたされたこと。小説・戯曲・舞踊などに關する清新瀟灑な見解の下に文藝批評の眞諦を唱せられたこと。四十年に亘つての不斷の研究をつゞけられてジエキスビヤ翻譯四十卷を完成せられたこと。更にこれらの有ゆる文藝を通して社會大眾の文藝趣味を涵養し、文藝思想を鼓吹せられてこの國の文藝教育の向上に貢献せられたことはまさしく驚異に値する程である。

大人が國劇革新の業績こそは目ざましいものの最も目ざましいもので恐らく大人畢生の最大關心事であらう。まこと大人は國劇の化身であり、國劇の權化である。大人は國劇の史的研究の精通者であり、國劇の理論的研究の權威者であると同時に、當時の國劇に對する指導者である。殊にその史劇向上に對する大人の業績は國劇史上の劃期的なものだ。

大人は藝術的批判の上から、近松巢林子・古河默阿彌・依田學海・福地櫻痴らの史劇に於ける缺點を指摘して「脚本の精髓は個々人物の性格を根本因となし、境遇を縁となし、此の因縁によりて成れる著大なる業果を描き、以て人事の眞相を現はすに在り。従つて史劇は件の人物を過去の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の眞相を過去事實の上に表現せんと力むる者のみ。

さればかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすが如きは抑も末なり。史劇の過去相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば則足る。

となし、更に進んで其の改良意見に及び、これま

で國劇の大缺點が、
一、叙事詩の體と劇詩の體との混淆。

二、性格を無視して事件を主とする事にあるを指摘し、何はさて措いても此の點に先づ改良を加へなければならぬことを論じて、蓋に歐洲風の性格劇の必要を主張せられたことは周知のことである。

大人の新樂劇の提唱も亦特筆すべきで、夫の「新樂劇論」と共に「新曲浦嶋」を著はされてその理論と實際とを明示せられた見識は日露戰爭時代に於ける我國民の情操的教養を如何に昂揚したか、我國民の品位を如何に高尚ならしめたかは知る人ぞ知る。

「俗曲のうちで最も節まほしに癖の少い長唄などを主臺とし、その派手と陽氣と爽快と流麗とに偏り流れて沈重嚴肅の雅調に乏しいのを補ふためには謡曲と一中節を以てし、さて又、劇詩的脚色の參考用としては、其の方面に更に幾歩かを進めたる常盤津・富本・竹本等を用ひ、尙ほ、竹本・長唄等を其の長所長所を抜いて補助材となし、尙其の上に剛健、活潑、雄大、壯烈などといふ趣致を加ふる爲には諸種の西洋樂劇を參酌し、而して振事本位に立脚して、どこ迄も國劇固有の特質を發展し、醇化することを努めるのが國劇改良の眞の方針であらうと信じます。」

とは大人がこの國從來の國劇を振事劇・淨瑠璃劇・能劇の三つとし、そして此らの三劇が有する樂劇としての特徴を検討し、進んで振事劇たる河

東・一中・新内・清元・富本・常盤津・長唄などを精緻に較察せられた結論であつて大人の樂劇に對する抱負の一端がうかがはれる。

大人はまた舞踊劇・兒童劇・野外劇についても史劇・樂劇と同じく理論と實際との努力がある。が細叙のひまがない。

いやが上にも國劇を向上せんとする大人の高く貴い熱意は英文專攻の學者として大人をして夙にシエクスピア研究に没頭せしめたのである。

「明治二十三年以來、すなはち我が演劇の刷新に志してからこのかたは、私は、我が劇を向上せしめる最好最捷の方便は、此一型に於て頗る相類し其内質に於ては、遙かに規模の上で、偉大に、遙かに思想の上で高尚に、遙かに心理的に深刻な——沙翁劇を當面の師表とするに如く事はあるまいと考へたのであつた。地味に適しない者は到底根づくまいといふ考へから内國産の夏蜜柑に西洋佛手柑を接木しようと思ひ立つたのであつた。」（逍遙選集「卷十」といはれ。

「本來自分は何の爲にシエクスピアの研究に志したのであつたか？ 明治十七年に「ジュリヤスシーザー」を義譯したのは初學の出來心に過ぎなかつたとして、早大の前身專門學校に文學科を創設した際に、シエクスピアを其主要課目としたのは、何の爲であつたか？ 當時、外國文學と

いへば、イギリス文學が主でもあり、二つには私の專修がイギリス文學であつたからでもあるが、其本願は寧ろわが國劇の向上に資する爲といふ點にあつた。其ころ、私は、國劇刷新の參考用にとて、一通り諸外國の劇を調べて見て、其大概が先づ、其體式上に於て、わが歌舞伎とは相容れない性質の物であるのを知つた。其中に獨りシエクスピア劇だけは、文學としては到底比較にならないが、劇としての様式の上には、歌舞伎と不思議な相似性を有してをり、これならば、随分相融合させることが出来さうなものだと思つた。其結果シエクスピアを攻究すること、自分の爲には勿論、廣く邦人の爲にも、國劇向上の最も適當な手段であると感じたのであつた。」（シエクスピア研究「九一〇」と述懐せられたのでその心境の鏡のそのやうであるかは明かである。

之を要するに大人七十七年の一生は極端にいへば國劇のために充當せられたものだといへる。いや豈に只一生のみではない。大人は最愛の未亡人百年の後には有ゆる遺産を國劇向上のために提供せんとして居られる。斯の如き高潔、雪のやうな精神は眞個に大人格の風格であつて、之を我が坪内逍遙大人にみるのは最も叙仰すべき極みで同じ時代に生を享けた私どもの最大の誇りである。偉なる哉。我が坪内逍遙大人。

天六圖書館報

閱覽人員及貸出冊數

昭和九年度 自9年4月1日 (開館204日)
至10年3月31日

科別	專 門 部				大 大 學 部 及 科	合 計	一 日 平 均
	法律 學科	經濟 學科	商業 學科	文 學 科			
閱覽人員	3,256	395	1,722	341	98	5,812	28.4
貸出冊數	5,334	724	3,066	599	180	9,903	48.5

天六學會圖書館統計

昭和九年度 自昭和9年4月1日 (開館日數204日)
至昭和10年3月31日

科 分 類 別	專 門 部				大 大 學 部 及 科	計	冊 數	冊 數
	法律學科	經濟學科	商業學科	文學科				
總 記	65	4	9	31	71	16	192	5
精神科學	275	4	66	177	66	1	31	615
歷史科學	24	2	12	32	22	1	91	3
政治學	369		53	91	11	14	538	1
法律學	3543	16	133	441	8	1	45	4170
經濟學	381	1	204	685	3	15	1288	1
社會學	92		33	67	11		203	
教育學	115	1	6	105	33	1	7	266
民俗學	35		8	16	5		64	
軍事學	3			1	1		5	
自然科學	13		4	10	1		28	
工藝學			7	38			45	
產業	2		12	9			23	
商業學	27		70	977	1		4	1078
美術	4		5	8	3		13	3
語 學	184	9	28	2	186	15	131	18
文 學	157	10	71	1	165	5	200	15
計	5285	49	721	33039	27	36	180	9788
總 計	5,334		724	3,066	599	180	9,903	
閱覽人員	3,256		395	1,722	341	98	5,812	

天六學會圖書館購入圖書

(1) 哲 學 教 育

小柳 司氣太著	東洋思想の研究	9版	九
乙竹 岩造著	新教育教授法	10版	九
増山 義亮著	教育行政原論	7版	七
吉田 熊次著	教育勅語釋義	再版	九
同 著	教育大意要義	16版	九
吉田 靜致著	人格の生活	3版	七
帆 足理一郎著	哲學概論	43版	一
篠 原助市著	理論的教育學	17版	八

(2) 歷 史、地 理

齋藤 清太郎著	西洋歴史地圖	50版	九
大塚 龍夫著	神皇正統記新講		九
辻村 太郎著	新考地形學 第一卷	5版	八
同 著	同 第二卷	5版	八

(3) 法 律、政 治

神川 彦松編	立教授還曆祝賀 外交史論文集		九
中野 登美雄著	統帥權の獨立		九
近藤 英吉著	物權法論		九

(4) 經 濟、産 業

増地 庸治郎著	經濟財務論 會計學全集第七卷		九
小菅 敏郎著	貸借對照表分析論		九
白井 義三著	現代工業政策論		九
高橋 龜吉著	ソシヤル、ダンピング		九
谷 川吉彦著	重糖 小賣店問題	再版	九
津村 秀松著	非常時日本の財政及經濟	6版	八
谷 川吉彦著	商業組織の特殊研究		六
苦米 地英俊著	商業英語通信軌範	37版	九
福田 敬太郎著	市場研究 第一卷		九
神 戸 正雄著	非常時の財源問題		八
西 垣 富治著	會計學提要		九
谷 川吉彦著	貿易統制論		九
渡部 寅二著	帳簿組織の研究		九
堀 經夫著	英吉利社會經濟史		九
本庄 榮治郎著	近世の經濟思想		六
青木、鈴木共著	簿記學理論と實際		八
三田 同學會著	國際經濟戰略		九
酒井 正三郎著	保險經營學		九
春日 井 薰著	不換紙幣通貨論		九
東 晋太郎著	歐洲經濟通史		八
大 塩 龜雄著	現代産業地理講話		九
景 山 哲夫著	貿易政策原論		九

(5) 語 學、文 學

井 上 翠編	支那語辭典		八
同 編	日華新辭典	3版	八
藤 村 作編	新辭典	65版	八
粕谷 眞洋著	和文獨譯法	11版	九
田中 芳意著	文檢英語科受驗法		九
阪 日 玄章著	中國文學の研究		九
久 松 潛一著	上代民族文學とその學史		九
大 塚 悅三著	文法に立脚せる萬葉集の研究	第一輯	九

本學學報は廣く校友各位に送呈致すは本意でありますが何分豫算の關係もあり、巨費を要しますので維持費制度により頒布致して居ります。維持費は年額壹圓でありますから精々御申込願ひ度、又維持費切れの方は發送封皮に維持費切の印を押して御通知致しますから御拂込下さい。

關西大學學報局

學報申込書

一金圓也 但學報維持費 夕年分(至昭和 年年 月月)

No. 右金額相添へ申込候也

昭和 年 月 日

氏名

關西大學學報局御中

明治 昭和 年 學部 專門部 科卒業

- 一、勤務先
- 一、現住所

拂込方法 振替貯金、郵便爲替 (不用の文字を抹消して下さい)

研究論集第三號

執筆者及題目

研究論集第三號は来る五月中旬發行の豫定にて、執筆者並に論文題目は左の通りである。

日本憲法特質論 教授 吉田 一枝
身元保護法の時間的通用範圍

西歐封建社會の構造 教授 矢口孝次郎
企業經營能率の測定 教授 西村勝太郎

楠公精神の展開 教授 新町 徳之
題未定 (Albous Huskeの文學論に關するもの) 教授 堀 正人

因に本年度論集編輯委員は
片山 正直 三枝樹正道
吉田 一枝 田邊 清市
瀧澤喜子雄 中村長之助
木村 健助 新町 徳之

研究論集第一號目次

(昭和九年十月發行)

王道の意義を檢討して皇道の法理的考察に及ぶ 學長 仁保 龜松
社會學及社會學論の體系形態 教授 岩崎 卯一

權力の構造 教授 大山 政一
都市計畫 教授 森下 彦一
特別市制論 教授 中谷 敬壽

貨幣景氣變動論 教授 武田 鼎一
連鎖店組織に就て 教授 加藤金次郎
ロシア東方政策の地政學的吟味

カントの歴史哲學 教授 中村長之助
片山 正直

研究論集第二號目次

(昭和十年二月發行)

倉庫寄託契約論 教授 野村 次夫
フランス法に於ける内縁 教授 木村 健助

貨幣の主觀的價值並に其の決定に關する考察 教授 正井 敬次
我國に於ける陸運事業の統制問題に就て 教授 河村 宜介

國民主義の基礎問題 教授 古川 武
カール・ディールの社會法的經濟學 助教授 赤羽豊治郎

平均値論 教授 河村 信一
佛教に於ける社會的實踐 教授 三枝樹正道

大正十一年六月十五日創刊
昭和十年四月十日印刷
昭和十年四月十五日發行

不許複製 編輯兼 神屋敷 民藏
發行人 谷口印刷所
印刷所 關西大學學報局
發行所 關西大學學報局

天六學舎 關西大學
電話 堀川 二七六〇
電話 大坂 二六七五

千里山學舎 關西大學
大阪市外千里山
電話 吹田 一一三三

甲 文 堂 刊 行

關 西 大 學 關 係 著 書

— 學 語 —

Junior College Readings

Edited by T. Suzuki

P. 165 ¥ 1.00

Reading in Social Economics

Edited by S. Hoshino
K. Isobe
B. Kondo

P. 166 ¥ 1.50

Sign of Four

Edited by Kobundo

P. 138 ¥ 1.00

Simmel's Social Philosophy

Edited by Kobundo

P. 122 ¥ 1.00

高 等 數 學 要 義	倫 理 學 史 要	日 本 憲 法 の 社 會 學 的 理 解	金 融 經 濟 總 論	商 品 學 要 說	國 際 經 濟 論	經 濟 價 值 研 究	商 法 抄 說
----------------------------	-----------------------	---	----------------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	------------------

(訂改)

教 授 河 村 信 一 著	講 師 龍 野 健 次 郎 譯	教 授 岩 崎 卯 一 著	助 教 授 森 川 太 郎 著	教 授 河 村 信 一 著	教 授 正 井 敬 次 著	教 授 武 田 鼎 一 著	講 師 國 歲 胤 臣 著
定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 二 〇 六 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁	定 價 判 上 〇 〇 〇 送 料 三 〇 四 頁

番〇二五二六阪大替振
番九四三一川堀話電

甲 文 堂

通中柄長區川淀東市阪大
前門正舍學六天學大西關

大 阪 法 學 院 部 長 和 田 于 一 著

夫婦財產法の批判

菊 判 上 製
紙 數 八 五 〇 頁
定 價 六 圓
送 料 廿 貳 錢

婚 姻 法 論

四 六 判 普 及 版
紙 數 八 〇 〇 頁
定 價 貳 圓 五 拾 錢
送 料 拾 四 錢

親 子 法 論

四 六 判 上 製
紙 數 七 八 〇 頁
定 價 四 圓 八 拾 錢
送 料 拾 四 錢

親 族 法 總 論

菊 判
紙 數 一 八 〇 頁
定 價 壹 圓 參 拾 錢
送 料 拾 四 錢

後 見 法

(親族法大綱
第四分冊)

菊 判
紙 數 一 一 〇 頁
定 價 八 拾 錢
送 料 拾 錢

民 法 講 話

四 六 判 上 製
紙 數 六 六 〇 頁
定 價 參 圓 八 拾 錢
送 料 拾 四 錢

商 法 講 話

四 六 判 上 製
紙 數 六 〇 〇 頁
定 價 參 圓 五 拾 錢
送 料 拾 四 錢

株 式 會 社

大 同 書 院

東 京 駿 河 臺 中 央 大 學 前

振 替 東 京 一 八 二 三 八 番
電 話 神 田 二 二 二 八 番

大 阪 北 區 梅 田 新 道

振 替 大 阪 一 一 五 一 番
電 話 北 區 一 六 七 五 番
番 二 七 九 一 番
番 三 二 五 五 番